

平塚らいてう書簡の紹介

——野田宇太郎文学資料館所蔵書簡翻刻(8)——

一

「元始、女性は大陽であつた」。『青鞥』発刊(一九一一年九月)の辞のこの言葉ほど女性解放を強烈に言い放つたマニフェストはない。『青鞥』の経営と編集執筆の中心的人物であり、後に女性解放のシンボルとなった平塚らいてうは、既に森田草平との「塩原事件」と森田草平の「煤煙」(『朝日新聞』連載)発表によって、当時充分に話題性のある良家の子女であつた。久留米絋の対の着物と羽織にセルの袴という男装の尾竹紅吉(後の富本一枝)の入社は「五色の酒」「吉原登楼」などのゴシップがジャーナリズムの揶揄と嘲笑の好餌になった。『青鞥』は第二巻第四号で荒木郁子の「手紙」が当局の忌諱に触れ、発売禁止処分になった。ジャーナリズムの攻撃は『青鞥』内部にも「新しい女」と呼ばれることを回避しようとして脱退したり、購読中止する者も出た。一九一二(明治四五)年夏、平塚らいてうは茅ヶ崎で奥村博(後に博史)と出会う。もう一つ、彼女の生涯を大きく左右したのは、スウェーデンの女性解放思想家エレン・ケイの「恋愛と結婚」との邂逅である。一九一三(大正二)年一月『中央公論』に「私は新しい女である」を発表、「新しい女」新宣言となった。『青鞥』第三巻第一号からエレン・ケイの「恋愛と結婚」の翻訳を連載し始めた。

一九一四年一月、らいてうと博は結婚という形式を取らない共同生活を巣鴨で営んだ。一九一五年には『青鞥』は発行部数減少や生活費などのこともあり、『青鞥』の経営と編集を伊藤野枝に譲り、一九一六年第六巻第二号をもって無期休刊となった。

与謝野晶子が一九一八(大正七)年三月、『婦人公論』で発表した「紫影録」の国家による母性保護は婦人の経済的独立に反する依頼主義だと主張したことに

対して、らいてうは『婦人公論』五月号で母性としての女性を強調して、劣悪な労働状態によって歪められた母性の権利の保護を主張した。いわゆる「母性保護論争」は山川菊栄を巻き込んで女性問題の基本的論題となった。

一九二〇年三月、男女の機会均等、男女の価値同等観、家庭の社会的意義、婦人・母・子供の権利擁護を旨指して「新婦人協会」が結成された。一〇月には、その機関誌『女性同盟』が発刊した。一〇二一年ごろ、らいてうは市川房枝との軋轢と博史の不満による不和で過度の心身疲労の自家中毒症状になり、療養のため上総の竹岡海岸に転地した。

一九二五年博史は成城学園の絵画教師となり、二六年秋には東京府北多摩郡砧村喜多見四一五(後に世田谷区成城町三六四)に家を新築、精神と経済はやや安定した。一九三〇(昭和五)年高群逸枝らの無産婦人芸術連盟に参加する。

それ以前から博史は成城在住の武者小路実篤と交流があり、広くなったアトリエでデッサンの勉強会を武者小路や新しき村関係者と開くようになった。博史製作の銀指環に対する世評が高まり、一九三四年頃から一家の経済的状態が好転する。一九四一年八月、長男敦史が早大を卒業すれば兵役に行かねばならず、幹部候補生試験を受ける時、私生児では不利だから、博史との婚姻届を提出し、奥村明^はとなった。一九四二年四月、成城の自宅を知人に貸し茨城県北相馬郡小文間村字戸田井に疎開、農耕生活に入る。

一九四六年、日本国憲法の中の、母性権利に不満を持つが、主権在民、基本的人権の尊重、男女同権、戦争放棄、平和主義に共感する。一九五一年二月、全面講和条約を求めて「講和問題に関する日本女性の希望事項」をダレス米國務長官に提出。一九五二年四月、「講和条約発効の日を迎え女性には再軍備に反対する」声明を発表。一九五三年四月、全日本婦人団体連合会結成、会長となる。同年一

原 武 哲

二月国際民主婦人連盟副会長に就任。一九五六年二月、三月、博史の自伝小説『めぐりあい』を『婦人公論』に掲載、同年九月、現代社より単行本として刊行。一九五八年七月世田谷区成城町五三〇に移転。一九六四年二月一八日奥村博史永眠。同年一月、『奥村博史素描集』を平凡社より刊行。一九六六年五月、ベトナム戦争終結のため「ベトナム話し合いの会」を起こし、反戦を呼びかける。一九七一年五月二四日、胆嚢胆道癌で永眠。享年八五歳。

二

野田宇太郎が平塚らいてうと交渉を持つようになったのは、いつからであろうか。一九四四年一月『文藝』創刊から一九四五年二月終刊までの編集記録『灰の季節』（修道社、一九五八年五月）や、一九四六年四月『藝林閑歩』創刊から一九四八年一〇月終刊までの編集記録『混沌の季節』（大東出版社、一九七一年五月）には、平塚らいてうの名はない。

野田宇太郎の「奥村さんの指環」（『わたくしの指環』奥村博史遺作集刊行会編、中央公論美術出版、一九六五年一〇月二〇日）と「らいてうさんとのめぐりあい」（『平塚らいてう著作集』月報3 1983年10月第3巻付録）がその手がかりを与えてくれる。それらによると、武蔵野市吉祥寺南町に住んでいた野田の自宅近くTという人の二階に、らいてうの長女曙生（社会学者築添正二夫人）一家が住んでいた。その築添正二が時々書物のことで野田宅を訪問して、築添家と野田家とは自然に親密になった。その築添家にらいてうが孫に会いに来ていた。

一九五一年頃麻布の龍土軒で新龍土会がはじまってから、奥村博史と野田は親しく会うようになったという。ある冬の晩、鷗外・柳村を偲ぶ九日会で奥村が軽い脳貧血で倒れたことがあったそうだ（奥村さんの指環）。

築添正二の紹介である日突然曙生の父（らいてうの夫）奥村博史が訪ねて来た。平塚らいてうとの恋愛と共同生活の自伝小説の原稿を持参し、その内容や出版について意見を求められた。その原稿の一部は、一九五六年『婦人公論』二月号、三月号に「めぐりあい」として発表された。そして同年九月、現代社より『めぐりあい 運命序曲』は『現代新書45』として刊行された。

野田宇太郎は文化総合雑誌『塔』の編集顧問を受け、月に一、二度神田にあった羽田書店に出かけた。ある日野田は座談会の司会をするようになっていたので、

午後羽田書店に行くと、平塚らいてうに初めて会った。野田は初対面であることも忘れて、『青鞥』に小説を発表していた鷗外夫人森しげ女（原稿に鷗外の手が加わっていたかどうかを尋ねた。らいてうはしげ女（原稿には鷗外らしい加筆と思われる跡などはなかったと答えた。その頃野田は成城大学非常勤講師（一九五五年四月〜七三年）として日本近代文学史の講義を担当し週一回通っていたので、同じ成城の奥村家での再会を約したという。

この野田の二つの資料には不審な点がある。野田が武蔵野市吉祥寺に住んでいたのはいつであろうか。らいてうが孫に会いに来たとあるので、一九四四年二月以降である。奥村、野田の出会いが「奥村さんの指環」では、一九五一（昭和二六）年と明示しているが、「らいてうさんとのめぐりあい」では奥村博史が野田宅を訪ねたのは、野田が大阪読売新聞に「関西文学散歩」を連載中とあるので、一九五六年五月二八日から五七年七月中旬までの間である。奥村博史の「めぐりあい」が『婦人公論』発表は一九五六年二月であるからそれ以前でなければならず、この両者は互いに矛盾する。「関西文学散歩」連載中ではなく準備中と考えると、一九五六年二月以前である。

野田とらいてうが出会った時期が『塔』の座談会司会の時というのも不思議である。『塔』は講談社『日本近代文学大事典』第5巻（石崎等執筆）によると、「昭和二四・一〜八・九合併。全八冊」とある。しかし、野田が成城大学に通ったのは、一九五五年四月以後であって、六年の齟齬がある。しかもらいてうより奥村博史の方が先に会ったというので、『塔』の一九四九年初対面は成立しない。『塔』ではなく、他の雑誌だったのかもしれない。

これらを総合して考えると、後述のように野田宇太郎宛平塚らいてう書簡の最古の一九五二年九月二七日付葉書によって一九五二年からあまり溯らない時期に二人の交流が始まったと推定される。一九五一年六月『日本読書新聞』に「新東京文学散歩」を連載し始めたので文学散歩取材のため、らいてうに問い合わせ、協力を求めたものであろう。従って一九五一年から五二年前半にかけて、らいてう・野田二人の交流が始まったものと思われる。二人の初対面は『塔』の編集ではなく、別の雑誌の出版社だったのではなからうか。

三

野田宇太郎宛の平塚らいてう書簡は、野田の一九八四年七月二〇日歿後、遺言によって蔵書は故郷福岡県小郡市に寄贈された。その『野田宇太郎蔵書目録』（小郡市役所、一九八七年三月二五日）によると、「書簡六通 はがき一五枚」とあるが、私が小郡市の「野田宇太郎文学資料館」で調査の結果、平塚らいてう書簡は封書五通（内一通は本文なし）、葉書一七通、平塚らいてう葬儀委員会封書一通、奥村敦史・築添曙生連名死亡通知一通（本文なし）である。

本稿では「野田宇太郎文学資料館」所蔵のこれらのすべての書簡を翻刻し、注解を施すことにする。書簡の翻刻にあたっては、原文が一行の場合は一行に活字化することを原則とした。可能な限り忠実に原文を再現し、筆者の意思を尊重したいためである。

四

(1) 一九五二(昭和二七)年六月二五日付5円官製葉書(消印 千歳 27・6・26 前8-12)

東京都下武蔵野市吉祥寺

二五〇七

野田宇太郎様

世田谷区成城町

三六四

平塚らいてう

六月二十五日

前署先日はわざわざおはがき頂きおそれ入りました。御骨折により一葉女史建碑のこと実現いたしますのをうれしく存じて居ります。岡田さま²どうしても御執筆願へませんので、こゝまで運んで頂き乍ら

女同士で、書く、書かぬと時を過してゐますのも

どうかと存じまして、一かうに自信のない事ながら、とも

かく御引受けいたしましたして、不出来ですが、区役所の

(中出氏出張で御不在のよし)

文化課長大隅氏の御使の方に御渡しいたしました。

あれでよろしきものかどうか一度御覧頂き度く、

なほ裏面の細字の方は、いつさう苦手で、手がふる

え、どうにも老人の文字が、あまり見苦しいやうに思ひ

ます。あなた様又ハ寺田さまに御願ひ出来ますなら幸と存じます。

どうぞよろしきやう御取りはからひ下さいませ。

〔注解〕

- 1 一葉女史建碑「樋口一葉終焉の地本郷丸山福山町四番地(現・東京都文京区西片一丁目一七番一七号)の『一葉樋口夏子碑』。一葉が一九九四(明治二七)年五月一日から九六一年一月二三日まで住んだ最後の住居跡に建てられた。文学碑には一九九四年四月二八日の日記の一部が刻されている。日記文以外の部分は平塚らいてうの揮毫である。野田宇太郎は正富汪洋と共にこの旧居を捜し出し、文学碑建立に奔走した。
- 2 岡田さま「岡田八千代。本稿「平塚らいてう書簡」(6)〔注解〕1参照のこと。
- 3 中出氏「未調査。
- 4 大隅氏「区役所の文化課長であろうが、未調査。
- 5 寺田さま「未調査。

(2) 一九五二(昭和二七)年九月二七日付5円官製葉書(消印 千歳 27・9・29 前8-12)

東京都武蔵野市

吉祥寺二五〇七

野田宇太郎様

世田谷区成城町

三六四

平塚らいてう

九月二十七日

御高著⁽¹⁾パンの会御恵贈いたゞきありがたく存じます。あれだけの資料をよく御集めになつたもの、あのころをいろ／＼思ひ出し、同じ時代を生きてきたものとして、拝読を、特にたのしみにいたして居ります。先日の一葉⁽²⁾の除幕式には参加出来ませんで、残念でした。風邪から肺炎になり長びいて弱つて居りましたが、ようやく少し元気を回復いたしました。その内一度出かけ度く思つて居ります。

拝受の御禮のみ 早々

〔注解〕

- 1 パンの会⁽¹⁾野田宇太郎著。明治四二年から四五五年にかけて、木下李太郎・北原白秋等によつて展開された近代耽美派文芸運動「パンの会」の研究書。「序」「序説」「九州旅行」「明星消ゆ」「PAN」「永代亭」「三州屋」「終焉の頃」「フリッツ・ルムプ」「屋上庭園」「パンの会の詩歌集」「補遺」「人名索引」。六興出版社。一九四九年七月一〇日発行。野田はこの著書を基盤として『日本耽美派の誕生』（河出書房、一九五一年一月一日）、『瓦斯燈文藝考』（東峰書院、一九六二年六月一日）を発表、その集大成である『日本耽美派文学の誕生』（河出書房新社、一九七五年一月二八日）で一九七六年芸術選奨文部大臣賞を受賞した。
- 2 一葉碑の除幕式⁽²⁾一九五二年九月七日に行われた丸山福山町の「一葉樋口夏子碑」の除幕式。平塚らいてうはこの碑の揮毫をしているので招待されたが、体調不良のため、欠席した。

- (3) 一九五六（昭和三一）年十月一日付5円官製葉書（消印 千歳 31・11・後016）

武蔵野市吉祥寺
二五〇七

野田宇太郎様

世田谷区成城町
三六四

平塚らいてう^(マ)
十月一日

郵便はがき

武蔵野市吉祥寺
二五〇七

野田宇太郎様



さあこまゆり
こまおゆり

武蔵野市吉祥寺
二五〇七
平塚らいてう
十月一日

(3) 1956年10月1日付野田宇太郎宛平塚らいてう書簡

御高著「六人の作家未亡人」御惠贈いたゞき
 ありがとうございます。さつそく興味ふかく
 拝読いたしました。白秋の夫人だつた
 江口章子さんについては少し事実と
 違うところを発見いたしました。いづれ
 そのうちお目のか、れる機会をえまして
 御話いたし度く存じます。娘あけみが何かと
 御厚情にあづかつておりますよしありがたく
 存じております。先日奥村の小説「めぐりあい」出版社
 から送らせましたが落手頂けましたでしょうか。御高覧、御批評いただけますなら
 幸でございます。拝受の御礼のみ 早々

〔注解〕

- 1 「六人の作家未亡人」野田宇太郎著。夏目漱石夫人鏡子・国木田独步夫人治子・北原派
 白秋夫人菊子・武田麟太郎夫人留女・太宰治夫人津島美知子・織田作之助夫人輪島昭子の
 六人の作家未亡人が作家を影で支えて、今日なおひそかに生きて行く姿を描いた。新潮社。
 一九五六年一〇月五日発行。
- 2 江口章子北原白秋の二番目の妻。一八八八（明治二一）年四月一日大分県西国東郡香々
 地に生まれる。一九〇三年四月大分県立第一高等女学校入学。一九〇六年一月安藤茂九
 郎弁護士と結婚。一九一五年一〇月離婚、上京し平塚らいてうを頼る。一九一六年五月北
 原白秋と葛飾亀井院に住む。一九一八年一月詩・短歌雑誌「ザムボア」（大正七年一月）九
 月。紫烟草社）の編集発行者。一九一九年七月白秋と婚姻届出。一九二〇年五月離婚。一
 九二八年詩文集『女人山居』出版。一九三〇年一二月中村戒仙と結婚。一九三四年『追分
 の心』出版。一九三八年剃髪尼僧。一九四六年二月二九日故郷香々地の座敷牢で死去。
 五九歳。
- 3 事実と違うところ平塚らいてうは「平塚らいてう自伝——元始、女性は大陽であった」
 下巻の「江口章子の波乱の生涯」を描いているが、野田宇太郎の『六人の作家未亡人』『国
 民詩人の妻 北原白秋未亡人菊子さん』などの点が事実と違うか、よくわからない。たぶ
 ん詩人生田春月夫人花世の紹介で江口章子と白秋のものを訪れたという野田説明が、らい
 てうから見れば紹介ではなく、たまたま章子と白秋の縁で二人は愛の
 生活に入ったというものが、それとも野田が書いている「木兎の家」地鎮祭の夜、章子の
 「某新聞社関係の男」との駆け落ち事件が事実と反しているのだろうか。
- 4 あけみ「曙生」。一九一五（大正四）年二月九日、奥村博史・平塚らいてうの長女とし
 て出生。二〇年四月私立滝野川幼稚園入園。二二年四月佐久山尋常小学校入学。同九月富
 士前小学校転校。二三年四月成城小学校入学。二八年四月自由学園中等部入学。三六年三
 月東洋英和女学院保育専門部卒業。三八年三月二四日築添正二と結婚。秋、鳥取に赴任。

- 5 四二年葉山、鎌倉に住む。四三年東京本郷に転ず。一九四四年二月一九日長男正生（まきみ）
 出生。一九四五年一月武蔵野市吉祥寺の知人宅に住む。四八年三月、母らいてうとの共著『母
 子随筆』を桃李書院より刊行。一九五〇年四月長女美可出生。一九五三年一月滋賀県立
 近江学園（南郷学園）に住み込む。一九五七年七月二五日二女美土出生。一九六六年九月
 一三日夫築添正二永眠。本稿「平塚らいてう書簡」（22）〔注解〕1を参照のこと。
- 6 奥村博史。画家。一八九一（明治二四）年一〇月四日、神奈川県藤沢市に奥村市太
 郎・なみの長男として生まれる。藤沢小学校、逗子開成中学校に学ぶ。大下藤次郎の日本
 水彩画研究所で学び、ついで油絵に転ず。一九二二年茅ヶ崎で年上の平塚らいてうにはじ
 めて出合い、恋愛。一九一四年一月、らいてうと果鴨で共同生活を営み、「若い燕」として
 話題を呼んだ。はじめ二科会に出品、後に国画会に移る。一九一九年畑中夢坡等の新劇協
 会に参加。六月有楽座でチェホフの『叔父ワニヤ』に出演。一九二五年成城学園の教師
 となる。成城に居を構え、武者小路実篤等とも交わり、新しき村の美術部に属した。銀指
 環の制作を始める。以後、油絵、演劇、指環が仕事になる。一九三六年中国蘇州、杭州、
 舟山列島の普陀山など描き、上海で偶然魯迅の急逝に出会い、臨終の肖像を油絵で描いた。
 一九五六年九月自伝小説『めぐりあい 運命序曲』を現代社から出版。一九六四年二月一
 八日、再生不能性貧血で永眠。
- 7 歿後『奥村博史素描集』、『奥村博史わたくしの指環』が遺作刊行会から刊行された。
 小説『めぐりあい』奥村博史著。自伝小説。生前の唯一の著作。一九四三年頃から執筆
 に取り組み、四七年頃完成する。一九五六年『めぐりあい』の一部を『婦人公論』二月号、
 三月号に連載、同九月『めぐりあい 運命序曲』として現代社から出版された。
 出版社奥村博史著『めぐりあい 運命序曲』の出版社現代社。

（4）一九五九（昭和三四）一月付5円切手活版印刷葉書（消印 千歳 34・1・
 後016）

武蔵野市吉祥寺

二五〇七

野田宇太郎様

賀春

亥どしを迎えいつそうのご活躍を期待し、ご健康をひたすらお祈
 り申しあげます。わたくし昨年中は闘病生活にあけくれ、心なら
 ずも失礼を重ねて参りましたことをお許し下さい。本年も養生専一
 に、たとえちよくせつ運動への参加はむずかしくとも、ふたたび読
 書と執筆にたえうるだけの健康をとりもどし、残された使命のいく
 ばくなりと果たしたき念願でございます。

どうか変らぬご交誼をお願いいたします。
一九五九年一月

平塚らいてう

東京都世田谷区成城町五三〇

〔注解〕

- 1 亥とし一九五九年。昭和三十四年。己亥。つちのとい。
- 2 成城町五三〇は前年一九五八年七月一日、成城の北の奥、成城町五三〇番地の新居に移転。長男敦史一家も近所の新築の家に移り、この時から博史と二人暮らしとなる。

(5) 一九六一(昭和三六)年三月二十四日付5円切手「裸女百態」絵葉書(消印
千歳 36・3・24 後6-12)

武蔵野市

吉祥寺二五〇七

野田宇太郎様

世田谷区成城町

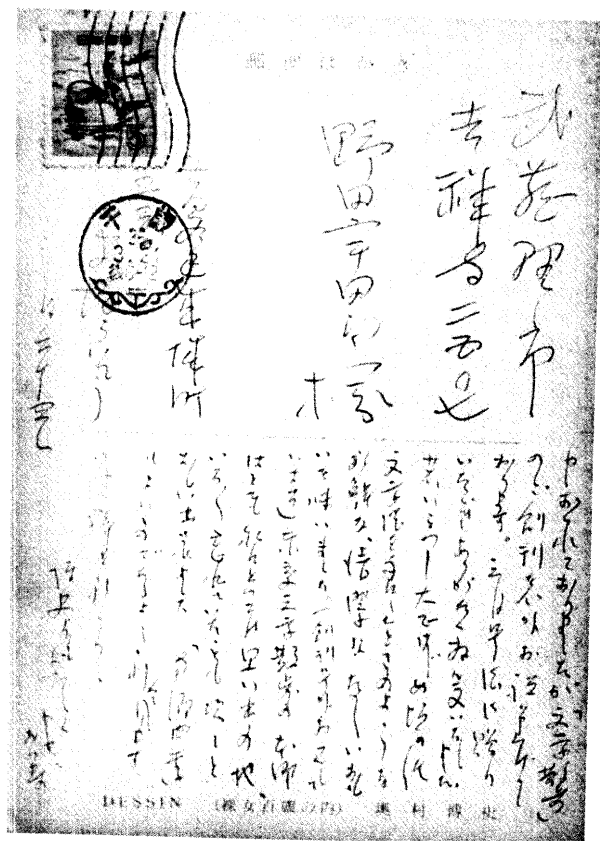
五三〇

平塚らいてう

三月二十四日

申しおくれておりましたが「文学散歩」
のご創刊を心からお祝い申あげて
おります。⁽²⁾三月号誌御贈り
いたゞきありがたく拝受いたしました。
若いころ―大正はじめ頃の仏
文学誌を手にしたときのような
新鮮な、清潔なたのしいおも
いを味わいました。(創刊号から拝見して

DESSIN (裸女百態の内) 奥村博史



(5) 1961年3月24日付野田宇太郎宛平塚らいてう書簡

います⁽³⁾ 東京文学散歩の本郷
はとも私にとつては思い出の地、
いろ／＼忘れていたことも次々と
おもい出されました。⁽⁴⁾「南郷四季」
もよいものであるよう祈っております。
ご健祥を祈りつ、

博史よりもよろしく申上っております

〔注解〕

1 「文学散歩」 野田宇太郎が編集した文芸雑誌。一九六一年一月創刊。一〇号までは雪華社発行。一一号より二五号までは文学散歩の会発行。「日本の風土、歴史、文学、芸術を愛し、国字国語の正しい在り方を尊重する者を以て会員とし、文化に貢献した人物の調査研究、文献や遺跡の保護その他人道的立場からの正常な日本文化擁護運動を行ふと共に、特に各地方郷土史研究の総合的發展に力を注ぐことを目的とする」同会の機関誌として第二五号（一九六一年一〇月）まで随時発行された。

2 三月号「文学散歩」一九六一年三月号。

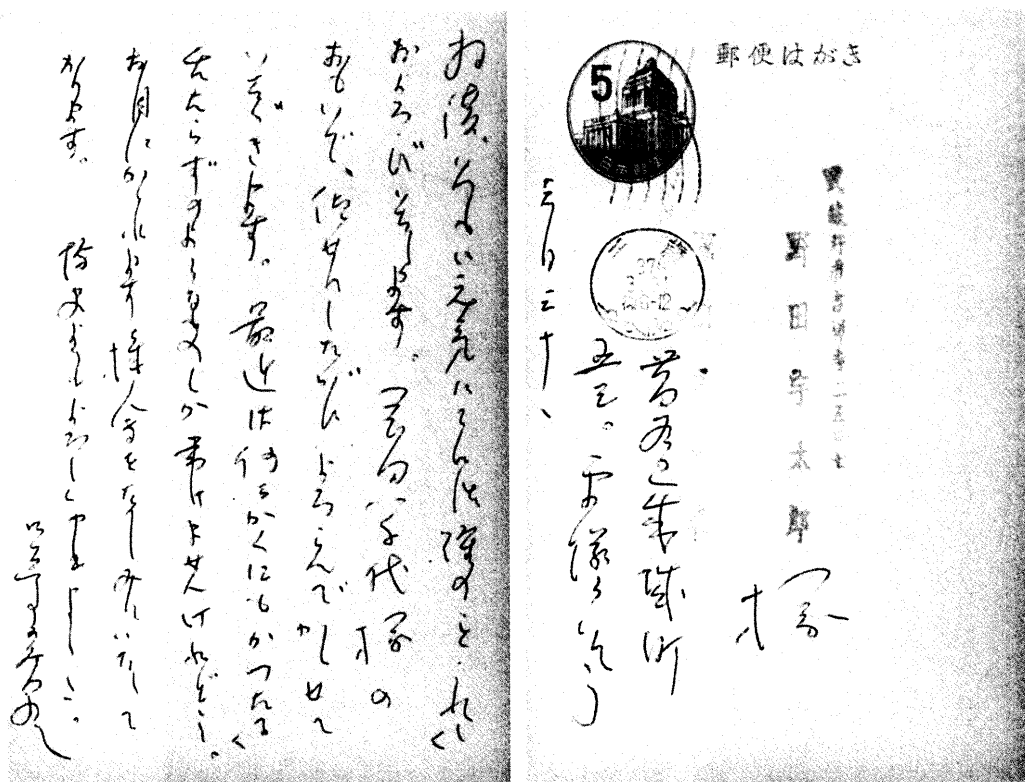
3 東京文学散歩「文学散歩」創刊号より随時連載された野田宇太郎執筆の「東京文学散歩山の手篇」「本郷・小石川」は第一〇号までに1から7まで連載された。

4 「南郷四季」 文学散歩 第二号より第一〇号まで全九回連載された築添明生（築添曙生のペン・ネーム）執筆の精神障害児施設報告である。「文学散歩」第三号に野田は編集後記に「築添さんは滋賀県の近江学園に家族と共に住みついて、不幸な精神薄弱児童の救済と教育にあたられていた人である。私はしばしば宇治川のはとり南郷の近江学園を訪れて、生れながらに人生の極北に運命づけられた不幸な子供たちを、温かく育てようとする築添さんたちの雄々しい姿をみつめた。この近江学園のことは私も「関西文学散歩」に少し書いた。「南郷四季」はむろん単なる生活記録ではない。あくまでも築添さんの文学である。」と記している。野田は「関西文学散歩」中巻（小山書店、一九五七年七月一日）の「弔花の墓」の中で、精神障害児福祉施設「近畿学園」を開園した斎藤用花夫妻と築添正二夫妻について述べている。

(6) 一九六二（昭和三七）三月三〇日付5円官製葉書（消印 千歳 37・3・31 後6-12）

武蔵野市吉祥寺二五〇七
野田宇太郎様

世田谷区成城町
五三〇
平塚らいてう
三月三十日



(6) 1962年3月30日付野田宇太郎宛平塚らいてう書簡

御返事のみ
早々

〔注解〕

- 2
- 岡田八千代（一八八三（明治一六）年二月三日広島県生まれ。小説家、劇作家、劇評家、演劇家。旧姓小山内。小山内薫の実妹。一九〇二年成女学校（牛込）に入学。『明星』一九〇二年八月号に小品「めぐりあひ」を発表。『婦人界』同年一〇号に小説「おくつき」を発表し、三木竹二（森鷗外次弟森篤次郎）に認められ、三木主宰の演劇雑誌「歌舞伎」に劇評を執筆する。一九〇三年二月、森鷗外に認められて『万年艸』に「この里」を、六月劇評「本郷座のほとぎす」を、「歌舞伎」に初めて芹影女の筆名で発表した。一九〇六年四月短編集「門の草」を如山堂書店から処女出版。同年二月森鷗外の世話で洋画家岡田三郎助と結婚。一九〇七年七月長編小説「新緑」を堺屋より、一九〇九年九月長編小説「恐怖」を水野書店より刊行。一九一一年九月「青轡」創刊、賛助員となる。一九二二年二月児童劇団「芽生座」を結成。一九二三年七月長谷川時雨と「女人芸術」を創刊。一九三〇年四月夫三郎助と渡仏。夫と再び不和。一九四八年五月日本女流劇作家会を創立、会長となる。一九六二年二月一〇日逝去。
- おもいで 野田宇太郎は「文学散歩」第一四号（一九六二年六月）を「回想の岡田八千代」特集にするつもりで故人の縁りの人たちに原稿執筆を依頼した。その依頼に応えたがこの書簡である。平塚らいてうは最初承諾したが、姉孝（恭子）の看病に行つて風邪をひき思ひ出は書けなかった。それで「文学散歩」第一四号には「岡田八千代「青轡」所載作品目録」のみを寄せている。

- 1
後0-6)
- (7)一九六二(昭和三七)年四月三〇日付5円官製葉書(消印)千歳 37・5

東京都武蔵野市

吉祥寺南町三ノ二五〇七

野田宇太郎様

世田谷区成城町
五三〇

平塚らいてう

郵便はがき



東京朝武義理市
吉市与南所三二五〇七
那由寺寺一子

子に生れし
 子に生れし

高見 亡師の葬儀とすませ、
 清き心になつて、又、整ふ元、
 いにし、すい、うばい、
 おは、い、い、
 野、重く、何と、
 言、下、
 う、く、
 へ、ぬ、
 へ、の、

(7) 1962年4月30日付野田宇太郎宛平塚らいてう書簡

前署、亡姉¹の葬儀をすませ、去る二十二日
 帰京いたしましたところ、又々熱発、臥床
 いたし、今月いづばい御待ち下さるとの
 おはがき²に對し、何とも申しわけなく存じ乍ら
 頭重く何を考える気力もないま、に今日
 (三十日) になつてしまひました。風邪をコヂらした
 ものらしく医者からも老人のカゼは肺炎
 にならぬよう警戒せよと安静を命ぜられまし
 たので、どうぞ御勘弁下さいませ。たいへん残念に
 おもつています。

〔注解〕

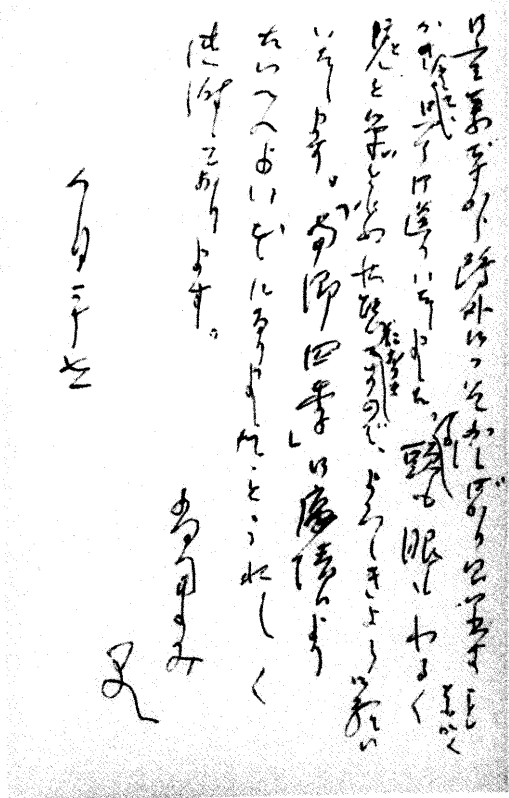
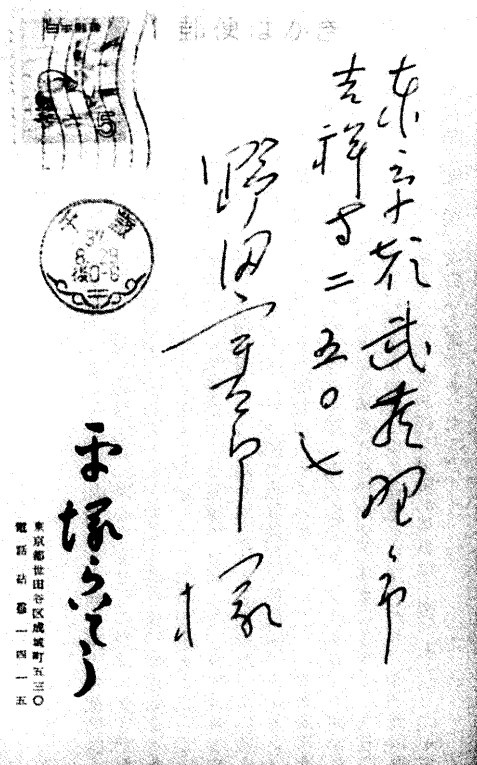
- 1 亡姉^{たか}孝。一八八五(明治一八)年一月三日、平塚定二郎・光沢の二女として麹町区三
 番町に生まれる。一九〇六年一月、孝は養子米次郎と結婚。後に恭子と改名。一九六二
 年四月一六日、胃癌で永眠。最初天理教に入り、その後大本教の信者となり、三五教に帰
 依し、不動の信仰に生きた。もともと無口で引つ込み思案ならいてうよりも孝が、陽気な
 文学少女で社交的だったという。晩年の二人からは想像できない。
- 2 おはがき^{はがき}平塚らいてう書簡(6)のように『文学散歩』第一四号「回想の岡田八千代」
 に掲載する予定の岡田八千代の思い出執筆が、姉孝の看護と風邪で遅滞していることに對
 して、四月いづばい待機するという野田の葉書。しかし、姉は亡くなり葬儀などに煩わさ
 れて、結局書くことができず、「岡田八千代『青鞥』所載作品目録」のみの掲載となる。

(8) 一九六二(昭和三七)年八月二七日付5円切手平塚らいてう私製葉書(消
 印 千歳 37・8・29 後016)

東京都武蔵野市
 吉祥寺二五〇七
 野田宇太郎様

平塚らいてう
 東京都世田谷区成城町五三〇
 電話 砧 (416) 一四一五

差出人
 氏名・住所
 活字



御言葉ですから鷗外¹について少しばかり思い出すことともかく
 かきまして、只今御送りいたしました。しかし頭も眼もわるく
 ほとんど筆のとれぬ状態にありますので、よろしきよう御願ひ

(8) 1962年8月27日付野田宇太郎宛平塚らいてう書簡

いたします。「南郷四季」⁽²⁾は廉価により
たいへんよい本になりましたことうれしく
感謝しております。

当用のみ

早々

八月二十七日

〔注解〕

1 鷗外についてⅡ『文学散歩』第一五号（一九六二年一〇月）「鷗外生誕百年の記念」掲載の鷗外についての思い出を、野田が平塚らいてうに原稿依頼したもの。らいてうは『文学散歩』第一五号に「鷗外先生について」を寄稿した。そこでは、『青鞥』に対する鷗外の温かい理解と好意ある関心に感謝する言葉が述べられ、「漱石の婦人に対する態度、その無関心さと、無理解さとくらべて何という違いでしょう。」と、言い切っている。森田草平との塩原逃避行後の漱石の対応は、平塚家に不快感を招いたので、このような言となったのであろう。

2 「南郷四季」Ⅱ『文学散歩』第二号から連載された築添明生の「南郷四季」を一冊にまとめたものか。未調査。国立国会図書館には未収蔵。

（9）一九六四（昭和三九）年元旦付4円切手「世界連邦建設を日本の国是に」
活版印刷年賀葉書（消印 千歳 38・12・31 後016）

武蔵野市吉祥寺

二五〇七

野田宇太郎様

年賀

あけましておめで
とーございます

元旦

（以下、活版印刷）

歴史的な東京宣言を発した第11回世界連邦世界大会で⁽¹⁾ 戦争
放棄の憲法をもつわが国こそ 各国にさきがけて 世界連邦
の達成を国是にしようと誓いました 今年はずひ国会の議
決を経て 世界連邦国家宣言を実現したいと願っております

平塚らいてう（手書き）

〔注解〕

1 世界連邦Ⅱ一九四五年九月尾崎行雄等が設立した「世界恒久平和研究所」の機関誌『一つの世界』を、平塚らいてうが読んで、世界連邦主義に関心を寄せたのはじまりであった。一九四八年八月六日「世界連邦建設同盟」が結成され、総裁尾崎行雄、副総裁賀川豊彦、理事長稲垣守克が就任した。一九四九年らいてうも入会した。会員が聖書と言っているエメリー・リヴスの『平和の解剖』、『世界憲法シカゴ草案』を読んで、世界連邦主義に二つの流れ——国連改良主義と人民会議主義の二つ方法があることを知った。らいてうは稲垣から世界連邦理論を学んだ。一九四六年一四ヶ国の世界連邦団体代表がルクセンブルグに集まり、世界的組織準備会を開き、一九四七年スイスのモントルーで「世界連邦世界運動」第一回世界大会を開いた。一九四九年八月第三回大会はストックホルムで開かれ、初めて日本代表が出席した。平塚らいてうは世界連邦建設同盟の理事になり、一九五〇年頃には常任理事になった。五五年頃に同盟が会長に東久邇稔彦を頂いたり、保守政治家が名を並べたりしたので、不快感をもったが、世界連邦運動の信条は不変であった（平塚らいてう自伝（戦後篇）続元始、女性は大陽であった）。

(10) 一九六四(昭和三九)年二月一八日付5円切手活版印刷死亡通知私製葉書
(消印 千歳 39・2・20 前8-12)

武蔵野市吉祥寺町

二五〇七

野田宇太郎様

夫奥村博史⁽¹⁾昨年十月以来「再生不能性貧血」⁽²⁾にて関東中央病院にて
加療中のところ二月十八日午前五時七十二才をもつて永眠いたし
ました

ここに生前のご厚誼を深謝し謹んでご通知申し上げます

追て告別式は二月二十一日午後一時より二時まで自宅において
神式にて営みます

昭和三十九年二月十八日

東京都世田谷区成城町五三〇番地

(小田急成城学園前駅下車)

妻 平 塚 らいてう
長 男 奥⁽³⁾ 村 敦 史
長 女 築⁽⁴⁾ 添 明 生
親戚代表 平⁽⁴⁾ 塚 米 次 郎
友人代表 武者小路⁽⁵⁾ 実 篤

〔注解〕

1 昨年十月以来一九六三年一〇月、らいてうは眼底出血の具合を診察してもらうため、夫博史と関東中央病院に行った。ついでに博史も診察を受けたところ、白血病の疑いのため、即刻入院となった(『平塚らいてう自伝(戦後篇) 続元始、女性は大陽であった』)。

2 再生不能性貧血⁽¹⁾博史は毎日輸血を受けながら、見舞いの花や果物を描き、六階の病室の展望を喜んで、楽しそうにスケッチに夢中であつた。亡くなる二週間前、らいてうは長男の敦史から博史の病気が容易ならざることを打ち明けられた。らいてうは病院に泊まり込んで看護したが、既に熱は下がらず吐血が続く、最悪の徴候が表れた。二月一八日、粉雪の降る未明に、思いもよらぬ病名のもとに、この世の命を終わつた。解剖の結果、再生不能性貧血と病名決定。「しかし病因は、多年油絵を描いていたためということもありうる」

—というようなことで、依然不明に終わる。」「わたくしの指環」「年譜」奥村博史遺作集刊行会編、中央公論美術出版、一九六五年一〇月二〇日。

奥村敦史⁽¹⁾奥村博史・明(らいてう)の長男。一九一七(大正六)年九月二四日東京府下滝野川上中里に生まれる。一九二〇年四月私立滝野川幼稚園入学。一九二三年九月成城小学校秋組に入学。一九三六年四月早稲田高等学校に入学。一九四一年二月早稲田大学理工学部機械工学科、繰り上げ卒業。三菱重工名古屋航空機製作所へ赴任。一九四二年二月応召、陸軍航空技術将校として千葉県柏部隊に入隊。一九四三年三月陸軍技術中尉となり、陸軍航空本部付となる。一九四四年一月二三日中山綾子と結婚式を挙げる。同年二月長男誕生。四五年早稲田大学専門部工学科航空機学科助教授。一九四七年春、成城の家で父母と同居。四九年早稲田大学理工学部機械工学科助教授。一九五六年一月二八日工学博士の学位を受ける。五七年同大学教授。一九五八年七月成城町のらいてう一家の近所に新築の家を建て、移り住む。六八年国内研究員(文部省統計数理研究所)。一九七〇年一月らいてう、妻綾子と共に伊豆今井浜にドライブ、今井荘に二泊、帰途はらいてうの希望で箱根まわりで帰宅。七四年ソ連モスクワ大学交換教授。八八年早稲田大学定年退職、名誉教授。著書『材料力学』(コロナ社、一九五八年)、『メカニクス入門』(共立出版、一九八四年五月)。

平塚米次郎⁽²⁾旧姓山中。和歌山県の農家出身。和歌山中学の優等生で、一九〇〇年夏、平塚家の養子となる。第一高等学校、東京帝国大学独法科を経て、通信省に入る。一九〇六年一月、孝と結婚、平塚家の家督相続人となる。らいてうの実家の当主であり、姉婿(義兄)に当たる。

武者小路実篤⁽³⁾小説家。「新しき村」主宰。奥村博史著『めぐりあい 運命序曲』(現代社、一九五六年一〇月三〇日)に序を寄せている。武者小路実篤の「奥村博史君のこと」(『奥村博史素描集』平凡社、一九六四年一月三〇日)では、「奥村博史君とのつきあいは何年になるか、四〇年近いつきあいと思うが、もっと前からだったかも知れない。奥村君はまだ若かった。しかし一番よくゆききしたのは、僕が成城に住んでいた時だから、今から三二、三年前だ。」とあるが、四〇年前とすると、一九二四(大正一三)年ということになる。しかし、「年譜」によると、一九三二(昭和六、七年)の項に「この頃から成城に住む武者小路実篤氏や新しき村関係の数人がアトリエに集り毎週デッサンの勉強会を開く。」が一番古い。

(11) 一九六四(昭和三九)年六月一二日付40円切手速達「平塚らいてう」専用封書(消印 発信 東京・世田谷成城北 39・6・12 前8-12 受信 武蔵野 39・6・12 後6-12)

速達

武蔵野市吉祥寺南町三ノ二五〇七
野田宇太郎様

六月十二日

平塚らいてう

東京都世田谷区成城町五三〇

(活版印刷)

電話 砧 (416) 一四一五番

(封筒のみ。本文なし)

(12) 一九六四(昭和三九)年七月二七日付5円切手「裸女百態」私製絵葉書(消印 千歳 39・7・28 後016)

武蔵野市吉祥

寺、南町三ノ二五〇^(ママ)

野田宇太郎様

世田谷区成城町

五三〇

平塚らいてう

七月二十七日

(表面)

おはがき拝見、ありがとうございます
ございます。奥村の¹

詩のあの各行の上につけ

てある番号は何のつもり

か私にはわかりませんが、気

に入った詩は自分で作曲していまし

たから、そんな関係からかもしれま

せんが、発表して下さる

のでしたら数字は消して頂

きたいとおもいます。いろ／＼と

お心づかいありがとうございます。

毎日お暑いことです。

どうぞおからだ大切に。不

DESSIN (裸女百態の内) 奥村博史

(裏面)

去る²十二日のお集りの報告

今やつと案内状で印刷中です。内容の訂正とたいへん

おくれてしまいました。昨夜伊勢正義氏³その他の方で画を選びました。

一回ですまず、近く又もう一度集ります。今週中に決定の予定。

〔注解〕

1 奥村の詩「奥村博史の詩とは、野田宇太郎の『文学散歩』第三号(一九六四年九月)に掲載された奥村博史の詩「素描について(遺稿)」と第二四号(一九六五年七月)掲載の詩「わたくしの指環(遺稿)」のことである。

2 十二日のお集り「奥村博史の遺作を出版するための相談会」であろう。まず素描集から刊行する予定で画の選択から始めたものと見える。

3 伊勢正義「奥村博史の最も親しい画家。一九〇七―一九八五。秋田県生まれ。大館中学校を経て、一九三一年東京美術学校西洋画科卒業。藤島武二に師事。三三年帝展入選。同年光風会展で受賞。三五年光風会特賞。第二部会展で特選。文化賞。協会創立会員。三七年日動画廊で個展。東山魁夷らと美術学校同期生と六窓会を結成。東京で歿す。代表作「キャバレー」(油彩、一九三六年)、「パンジーのある静物」(油彩、一九六三年)。本稿「平塚らいてう書簡」(19)〔注解〕2参照のこと。

(13) 一九六四(昭和三九)年六月一二日付10円切手「平塚らいてう」専用封書(消印 千歳 39・6・19 後612)

武蔵野市吉祥寺

南町三ノ二五〇七

野田宇太郎様

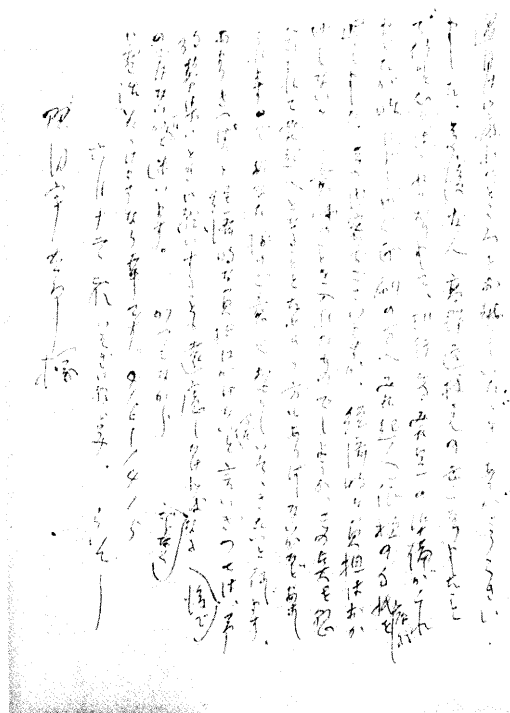
平塚らいてう

東京都世田谷区成城町五三〇(活版印刷)

電話 砧 (416) 一四一五番

(以下、手書き)

過日は御疲れのところをお越しいたゞきありがとうございます



平塚らいてう

武部 武部 武部
あや 武部 武部
武部 武部 武部

(13) 1964年6月12日付野田宇太郎宛平塚らいてう書簡

ました。その後友人高群逸枝さんの亡くなりましたこと
で何かと心うば、れておりまして、刊行会発足の準備がくれ
ましたが昨日ようやく印刷の方へ発起人依頼の手紙原稿を
廻しました。その内容でございいますが、経済的な負担はおか
けないという意味のことを入れたものでしょうか、その点を懸
念されて発起人となることをためらう方もありはしないかなど案じ
られますのであなた様のご意見おもしろいたづきたいと存じます。

あまりきつぱりと経済的な負担はかけないのだと言いきつては、後で予
約募集のとき御願ひすることも遠慮しなければならなくなる
のではないかなど迷います。かつてながら

御電話いたゞけますなら幸いです。416-1415

六月十二日朝 いそぎ御願ひのみ、 らいてう

野田宇太郎様

(以下、活版印刷)

御 願 い

新緑の色もいつか深まり、いよいよ真夏も間近くなってまいりました。お元
気でいらつしやいましょうか。日ごろは身辺にとりまぎれてごぶさたのみ申訳
なく存じております。

さきに奥村博史帰幽の節は、お心づくしをたまわり、まことにありがたく存
じました。早いもので、百日祭もとどこおりなくすませ、独り居のわびしさに
もようやく慣れそめたこの頃でございす。

さて、このたびはまことに勝手な御願ひを申しあげたくお便りいたしますこ
とをおゆるし下さい。

実は、奥村の遺作のうちより裸婦百態素描集と色刷りの指環の本を何らかの
形でこの際出版いたしたく存じ、つきましては故人にご縁故の深かった方々、
ならびに故人の遺作を愛蔵される方々に発起人におなりいただいて、「奥村博
史遺作集刊行会」というようなものを発足させ、この仕事の完成を期したいと
存じます。それにつき早速ながら貴方さまに発起人におなりいたさたく、お
願ひ申し上げる次第です。

お忙しくお過しの貴方さまに、このようなお願いを突然申し出ますのは、た
いへん心ないことのようにございますけれど、故人をよく知り、愛して下さ

ました皆さま方とともに、夢多い故人のささやかな足あとをふりかえつてみたい私の切なる願いからのございます。

どうぞ、私の気持をおくみとり下さいまして、発起人をお引受け下さいませよう、よろしくお願い申し上げます。

(恐れ入りますが折返しお返事いただけますなら、この上ない幸せでございます)

昭和三十九年六月 日

野田宇太郎様

(以下、手書き)

平塚 らいてう

過日はありがとうございます。よろしく願ひいたします。

とにかくこの依頼状を百名あまりに本日出しました。

〔注解〕

1

高群逸枝Ⅱ一八九四年一月一八日―一九六四年六月七日。熊本県生まれ。詩人、評論家、婦人運動家、女性史研究家。一九三〇年一月、平塚らいてう等と無産婦人芸術連盟を結成。三月機関誌『婦人戦線』を刊行しアナキズム系の評論活動を行なった。らいてうの『元始』女性は大陽であった―平塚らいてう自伝(完結篇)によると、「そのころ―いいえ、その後とも終始、高群逸枝さんほど、わたくしを惹きつけたひとはいません。ただ、もう無性に好きになつた。わたくしが高群逸枝さんの存在を知ったのは遅く、大正十五年ごろかとおもいます。ふとした機会に、高群逸枝さんの『東京は熱病にかかつてゐる』ほか、二、三の彼女の文章を読んだときから、わたくしの魂は、すっかりこのひとつにかまえてしまひました。」(高群逸枝に魅せられる―「無産婦人芸術連盟」のころ)とある。一九六二年一月一八日、高群逸枝の望郷子守唄の碑が、熊本県松橋町寄田神社境内に建立され、除幕式に際し、らいてうの代理として奥村博史が出席、挨拶の代読をした。奥村は「高群逸枝の松なよかはいせ集う歌碑をたてる人はよかよか」という即興歌を作つて、らいてうに送った。高群と出身地松橋町を読み込んだものであった(高群逸枝さんの歌碑)。高群は一九六三年『日本婚姻史』を書き上げた後、体が不調であった。『続招婿婚の研究』が完成したら、らいてうの家で語り合おうと約束していたが、一九六四年六月七日、国立東京第二病院で癌性腹膜炎のため、死去した。七〇歳。らいてうはこの年、夫と盟友の、かけがえない二人を失った(高群逸枝さんの訃報)。

2

裸婦百態素描集Ⅱ『奥村博史素描集』奥村博史遺作集刊行会編(平凡社、一九六四年一月三〇日)のこと。

3

指環の本Ⅱ『わたくしの指環』奥村博史遺作集刊行会編(中央公論美術出版、一九六五年一〇月二〇日)のこと。

(14) 一九六四(昭和三九)年七月付10円切手「平塚らいてう」専用封書(消印千歳 39・8・14 後6―12)

武蔵野市吉祥寺

南町三ノ二五〇七

野田宇太郎様

平塚 らいてう

東京都世田谷区成城町五三〇

電話 砧(416) 一四一五

(以下 全文 活版印刷)

盛夏の候をむかえお元気で過ごしていらっしゃいますか。その後ごさした申しあげましたが、先日は奥村博史遺作集刊行会の発起人をご快諾下さいまして、まことにありがとうございます。

このたび発起人をご承諾下さいました方々は別記の百名あまりで、かくも多方面の先輩やお友だちの友情に支えられて、この刊行会を発足させることができましたことは、故人はもとより、わたくしにとりまして大きなよろこびであり、ふかい感謝でございます。

お蔭さまで、刊行会の発足とともに、平凡社が 社長下中邦彦氏のご厚意により、デッサン集の出版をお引き下さることにになりました。それで、さしあたり発起人有志、十五名の集りをさる七月十二日、私宅で開き、平凡社から提示された案にもとづき、ご検討いただきました結果大体次のようなことを決めました。

大きさ―B4判(アサヒグラフの大きさ)

内容―デッサン五十葉、油絵原色版一葉

用紙―ダイヤペーク、又はケント

体裁―綴じずに、タトウ包みとする

製作部数―五百部(内、三百部を刊行会として頒布)

頒価―二、五〇〇円程度

(印刷は大塚巧芸社による)

なお、発行の期日は十月中の予定のこと、予約募集の印刷物を早くつくることなど話されました。今後刊行会は平凡社内に置き、会の事務は平凡社がして下さいます。

右、御礼とともに、大略ご報告申しあげました。何かとお気づきの点について、ご意見およせいただければ幸いに存じます。

酷暑の折からご健康をお祈りいたします。

(申し忘れましたが、指環の本の出版に先だち、雑誌「太陽」にその一部を掲載することになりました。多分十一月号あたりかと思っています。)

昭和三十九年七月

平塚らいてう (手書き)

野田宇太郎様

(以下、活版印刷)

発起人氏名

(五十音順
敬称略)

青山 圭男	加藤八千代	佐藤 進三	萩谷 巖
赤尾 好夫	金嶋 桂華	佐藤 千寿	服部正一郎
赤城 淳	神近 市子	佐藤 紀子	林 武
赤城 輝子	軽部 清子	佐藤 若菜	浜田 糸衛
蘆原 英了	川喜多道子	山東誠三郎	日比谷八重子
新谷 愛子	河崎 なつ	式場隆三郎	平井康三郎
生田 花世	川村たか子	柴田 静子	藤江 志津
石田 アヤ	神崎 清	上代 たの	別府貫一郎
伊勢 正義	岸田 時子	杉 裕之	細川ちか子
板倉 賛治	岸田鶴之助	鈴木 天明	堀川 肇子
市川 清	金須千枝子	高木 珠江	松山 善三
市川 房枝	河野 義博	高橋邦太郎	真鍋 静子
糸賀 一雄	高良 真木	田坂 乾	水沢 澄夫
井上 鐘	小林 哥津	千葉千代世	水谷八重子
今井 いく	小林 作子	辻 信彦	水野 以文
今田 謹吾	小林登美枝	勅使河原蒼風	源川 雪
岩波 淳子	小林 秀雄	遠山 静雄	宮田 重雄

植原 路郎	五味 英子	戸川 エマ	武者小路実篤
榎 恵	五味 秀夫	徳永 恕	村上 佳寿子
大下 はる	小森宗太郎	富本 一枝	山川勇一郎
大橋 鎮子	小山 周次	豊増 昇	山高しげり
小笠原貞子	小山 良修	中尾恵津子	吉田小五郎
岡本 半三	神原 勇吉	中河 与一	吉田 萌子
小島辰之助	坂本 良隆	中西 悟堂	吉屋 信子
小原 国芳	桜沢 如一	夏川 静江	渡辺 貫三
小原 信子	桜沢 リマ	日塔 笑子	渡辺 もと子
小原 博司	笹川 玉庭	日塔 智子	東山千栄子
笠置八千代	笹野徳太郎	野口 道方	
加藤 花子	佐藤 欣子	野田宇太郎	

〔注解〕

- 1 タトウⅡ畳紙。厚手の和紙に、渋、漆などを塗り折り目をつけたもの。衣類や結髪の道具などを包むのに用いる。ここではデッサンの紙を包むために用いた。
- 2 頒価Ⅱ予定では二五〇〇円だったが、出来上がった時は、二七〇〇円になった。
- 3 発行の期日Ⅱ「十月中の予定」とあるが、実際は十一月三十日に発行した。

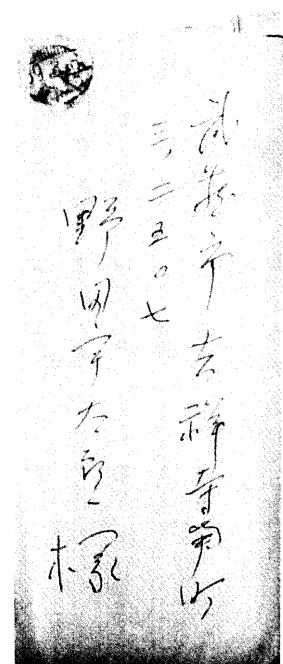
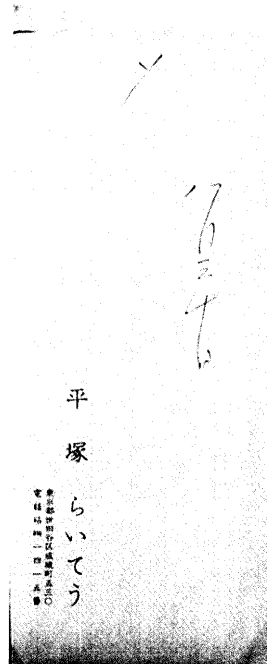
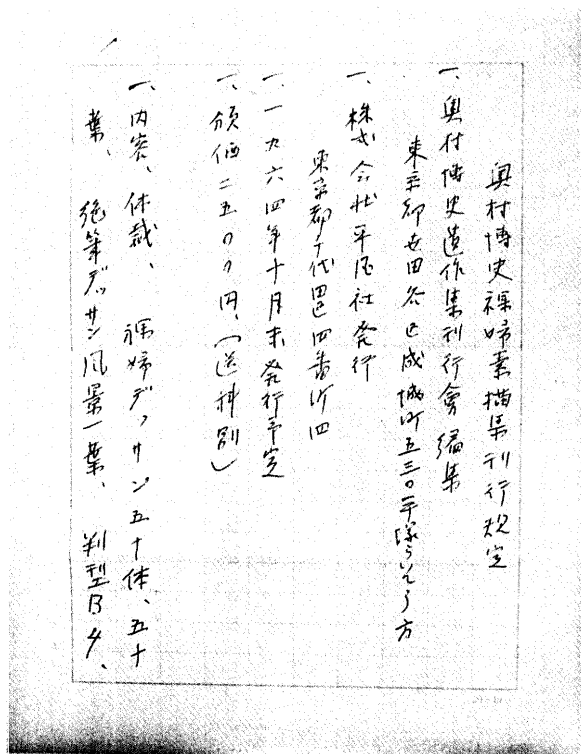
(15) 一九六四(昭和三九)年八月三〇日付10円切手「平塚らいてう」専用封書
(消印 千歳 39・8・□ 前□□)

武蔵市吉祥寺南町
三ノ二五〇七
野田宇太郎様

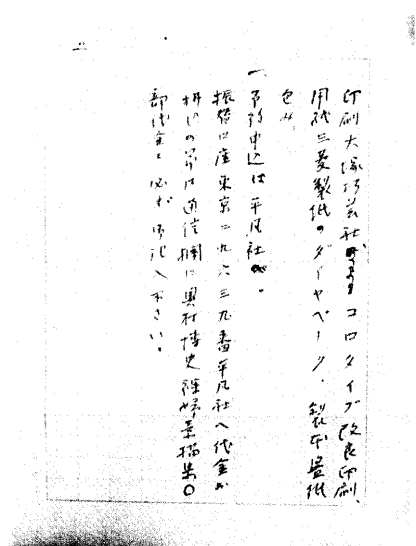
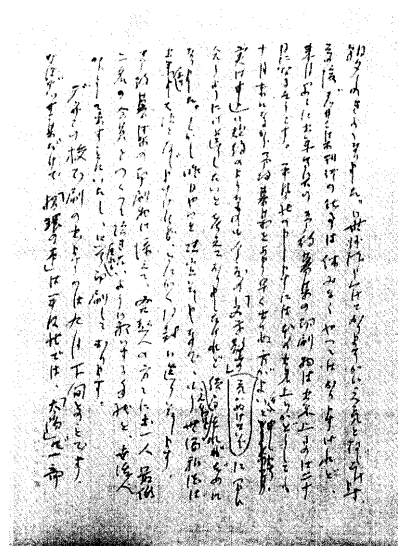
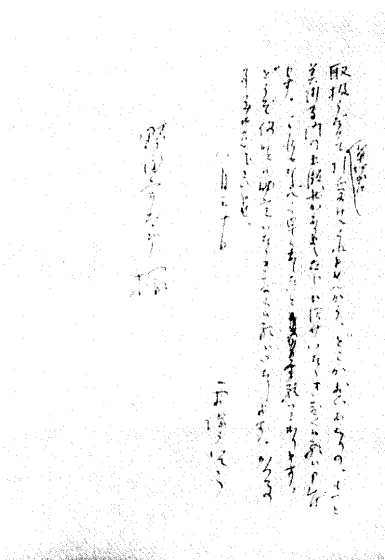
八月三十日

平塚らいてう

東京都世田谷区成城町五三〇 (活版印刷)
電話 砧 (416) 一四一五番



(15) 1964年8月30日付野田宇太郎宛平塚らいてう書簡



(15) 続1964年8月30日付野田宇太郎宛平塚らいてう書簡

(以下、手書き)

奥村博史裸婦素描集刊行規定

一、奥村博史遺作集刊行会編集

東京都世田谷区成城町五三〇平塚らいてう方

一、株式会社平凡社発行

東京都千代田区四番町四

一、一九六四年十月末発行予定

一、頒価 二五〇〇円(送料別)

一、内容、体裁 裸婦デッサン五十体、五十

葉、絶筆デッサン風景一葉、判型B4、

印刷大塚巧芸社、コロタイプ改良印刷、

用紙三菱製紙のダイヤペーク、製本量紙

包み。

一、予約申込は平凡社。

振替口座東京二九六三九番平凡社へ代金お

払込の節は通信欄に奥村博史裸婦素描集〇

部代金と必ず御記入下さい。

朝夕しのぎよくなりました。御無沙汰申上げておりますが御元気と存じ上げま
す。

その後^①デッサン集刊行の仕事は休みなくやつてはおりますけれど、

来月一九日に出来上る筈の予約募集の印刷物は出来上るのは二十

日になるそうです。平凡社の申しますには本の出来上りかどうかどうして

十月末になるから予約募集をあまり早く出さぬ方が気がぬけないでよいなど申

します。

実は申込の規約のようなものも今度の「文学散歩」^②に間に

合うように御送りしたいと考えておりましたけれど結局こんなわけでそれがだ

めに

なりました。しかし昨日やつと決定いたしましたので、もう無論雑誌は

出来上りました頃と存じますけれども、とにかく同封御送りいたします。

予約募集の印刷物に添えて、発起人の方々に一人最低

二名の会員をつくって頂きたいよう御願いする手紙と、世話人
からとして出すことにいたし、御つてそれも印刷しております。

デッサンの校正刷の出すのは九月下旬とのことでした。

なほデッサン集だけで「指環の本」^③は平凡社では、「太陽」で一部
取扱うだけで単行本は引受けてくれませんか、どこか心あたりの、もつと
美術専門の出版社がありましたら御紹介いただき度く御願ひ申上げ
ます。これもなるべく早く出したいと願つております。

どうぞ何かと御助言いただき度く御願ひ申上げます。かつての
事のみ御免下さいませ。

八月三十日

平塚らいてう

野田宇太郎様

〔注解〕

1 デッサン集Ⅱ『奥村博史素描集』奥村博史遺作集刊行会編、平凡社、一九六四年一月三
〇日のこと。

2 今度の「文学散歩」Ⅱ『文学散歩』第二二号(一九六四年九月)に奥村博史の「素描につ
いて(遺稿)」、平塚らいてうの「奥村博史の裸婦素描について」が掲載され、野田宇太郎
の「編集室より」で一四名の刊行会が組織され、頒価二五〇〇円程度、一〇月末頒布予
定とあり、申し込みを募っている。

3 「指環の本」Ⅱ『わたくしの指環』(奥村博史遺作集刊行会編、中央公論美術出版、一九六
五年一〇月二〇日)のこと。

(16) 一九六四(昭和三九)年九月一二日付5円切手「裸婦百態」私製絵葉書(消
印 千歳 39・9・12 後6・12)

武蔵野市吉祥

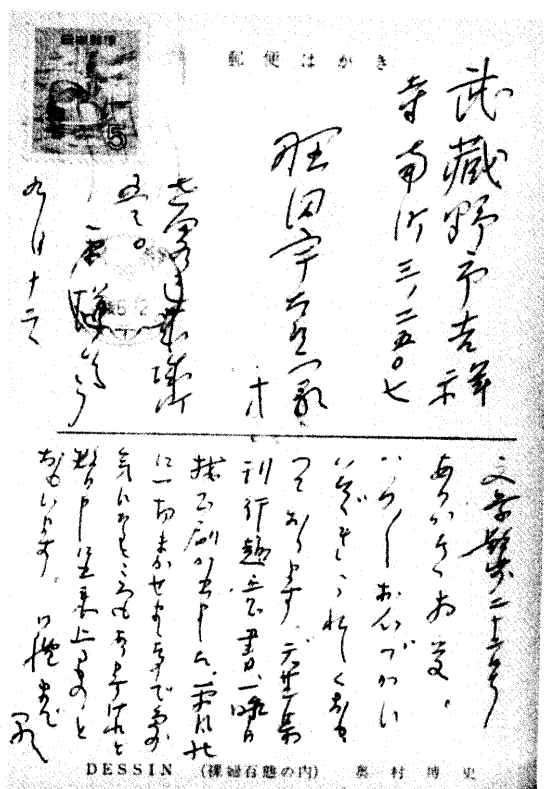
寺南町三ノ二五〇七

野田宇太郎様

世田谷区成城町

五三〇

平塚らいてう
九月十二日



(16) 1964年9月12日付野田宇太郎宛平塚らいてう書簡

文学散歩二十二号
ありがたく拝受。

いろ／＼お心づかい
いたゞきうれしくおも
つております。デッサン集

刊行趣意書、一昨日
校正刷が出ました。平凡社

に一切まかせましたので、多少
気になるところもありますけれど

数日中に出来上がるものと
おもいます。御禮まで

早々

【注解】

- 1 文学散歩二十二号＝本稿「らいてう書簡」(15)【注解】2参照のこと。
- 2 刊行趣意書＝未見。

(17) 一九六四(昭和三九)年十一月二十六日付5円切手「平塚らいてう」専用葉
書(消印 千歳 39・11・26 後6・12)

東京都武蔵野市
吉祥寺南町三の四三―四
野田宇太郎様

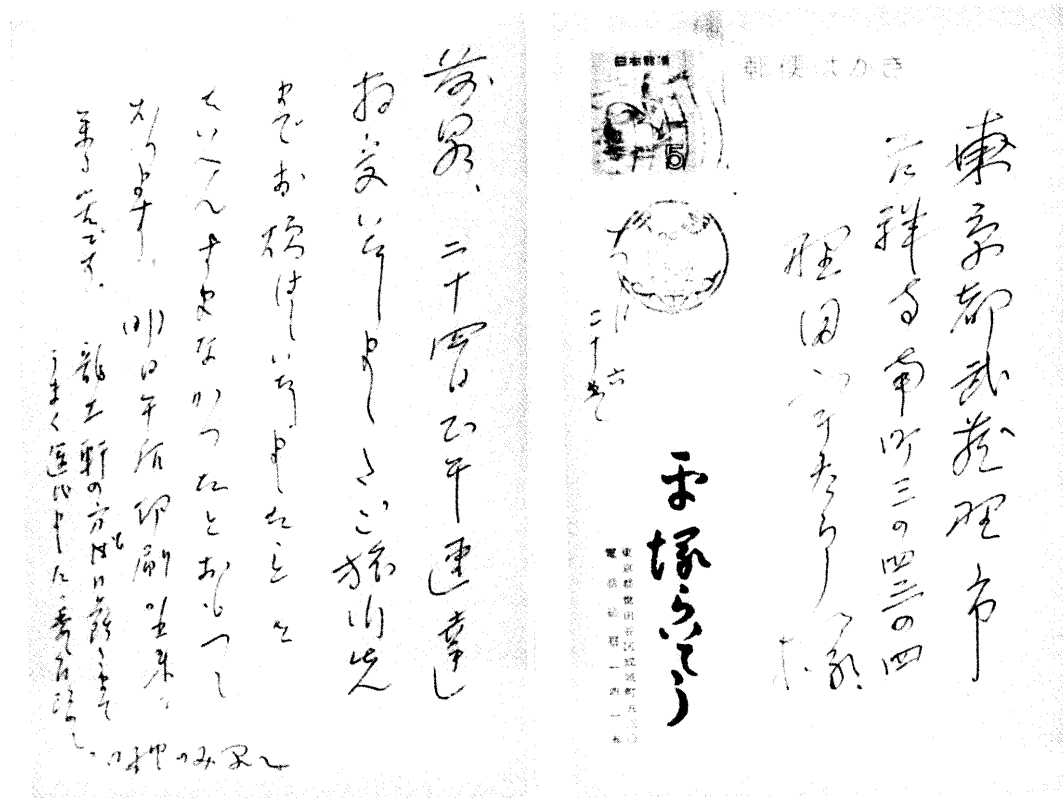
平塚らいてう

東京都世田谷区成城町五三〇
電話 砧 (416) 一四一五
(活版印刷)

十一月二十六日

DESSIN (裸婦百態の内) 奥村博史

前署、二十四日正午速達
拜受いたしました。ご旅行先
までお煩はしましたことを
たいへんすまなかつたとおもつて



(17) 1964年11月26日付野田宇太郎宛平塚らいてう書簡

おります。明日午后印刷が出来て
来る筈です。龍土軒の方も御蔭さまで
うまく運びました。委くは改めて。
御禮のみ 早々

【注解】

1 龍土軒は麻布新龍土町にあったフランス料理店。一九〇四（明治三七）年ころ蒲原有明・柳田国男・国木田独步・田山花袋・島崎藤村・徳田秋声・川上眉山・小栗風葉等の中堅詩人や作家がここに集まり、酒を酌み交わしつつ新文学、新思想が情熱的に語られ、この自然主義文壇の親睦団体を「龍土会」と称した。一九一六（大正五）年ころには龍土会は自然消滅した。ここでは一九六五年二月一四日、麻布龍土軒で開かれた「奥村博史君を偲ぶ会」のことである。

（18）一九六五（昭和四〇）年六月九日朝付40円切手速達「平塚らいてう」専用封書（消印 発信 東京世田谷成城北 40・6・9 後0-6 受信 武蔵野 40・6・10 前8-12）

速達
武蔵野市吉祥寺南町
三ノ三四ノ四
野田宇太郎様

六月九日朝

平塚らいてう（活版印刷）

東京都世田谷区成城町五三〇
電話 碯 (416) 一四一五番

野田先生 六月九日朝 らいてう

先日は御多忙の中をおでかけ頂き御それ入りました。またその節は御厄介のこと御引受け頂き御苦労に存じます。早速東芝印刷社⁽¹⁾長に御願ひ下さいましたそうでありがとうございます。間沢さんのことは哥津ちゃん

てう著作集』全八巻、大月書店、一九八四年二月完結。一九九二年発足の「平塚らいてうの会」第二代会長。

(19) 一九六五(昭和四〇)年七月三〇日付5円切手「平塚らいてう」専用葉書
(消印 千歳 40・7・30 後6-12)

武蔵野市吉
祥寺南町

3-43-4

野田宇太郎様

七月三十日

平塚らいてう

東京都世田谷区成城町五三〇

電話 砧(416) 一四一五

(活版印刷)

(表面)

きびしいお暑さになりました。

お齒はいかゞですか。

御自愛御祈り

いたします。

(裏面)

先日は長時間ありがとうございました。□□まで大成功でした。

「文学散歩」うれしく拝受、早速拝読いたしました。ありがとうございます。

その後集ったユビワのわりつけに、二、三回三氏にお集りいたゞき

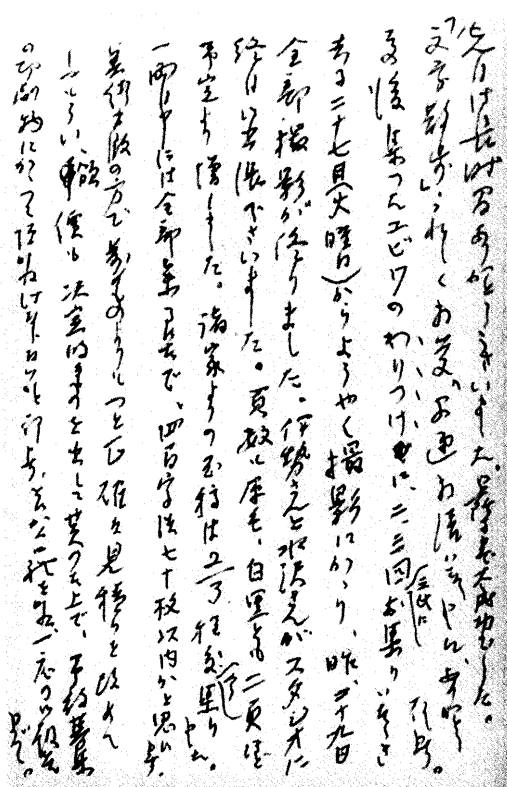
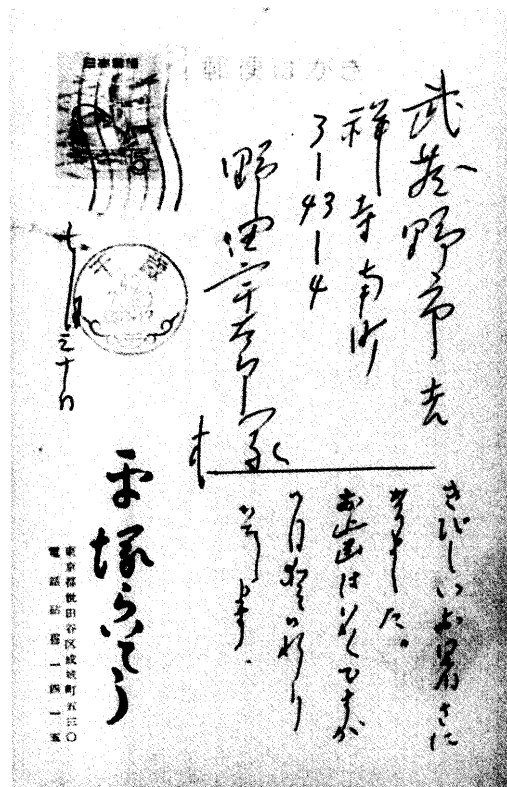
去る二十七日(火曜日)からようやく撮影にかゝり、昨、二十九日

全部撮影が終了しました。伊勢さんと水沢さんがスタジオに

終日御出張下さいました。頁数も原色、白黒とも二頁ほど

予定より増しました。諸家よりの玉稿は2/3程度今集りました。

一両日中には全部集る筈で、四百字詰七十枚以内かと思ひます。
美術出版の方で前のものよりもつと正確な見積りを改めて
してもらい、頒価も決定的なものを出して貰つた上で、予約募集
の印刷物にかゝつて頂かねばならないかと存じます。とにかく御禮を申上、
一応の御報告まで。



(19) 1965年7月30日付野田宇太郎宛平塚らいてう書簡

〔注解〕

- 1 「文学散歩」Ⅱ『文学散歩』第二四号（一九六五年七月二五日）には奥村博史の詩「わたくしの指環（遺稿）」と「奥村博史指環の本の刊行」が掲載された。
- 2 伊勢さんⅡ伊勢正義。画家。「わたくしの指環」（奥村博史遺作集刊行会編、中央公論美術出版、一九六五年一〇月二〇日）の「奥村さんと銀の指環」で「奥村さんの銀の指環の魅力は、これをもつ人びとに不思議な豊かさや充実した満足感を与えずにはおかまいだろう。そして、つねに私の小指にあるオニックスの傑作は、奥村さんのすぐれた芸術的精神と私への親愛の形見として、いつまでも私を離れることがないであろう。」と書いている。本稿「平塚らいてう書簡」〔12〕〔注解〕3参照のこと。
- 3 水沢さんⅡ水沢澄夫。一九〇五―一九七五。栃木県生まれ。美術評論家。一九三一年から柳宗悦の民芸運動に参加。美術雑誌『宝雲』編集。一九七三年から町田市立町田郷土資料館初代館長。著書『美術覚書』（昭森社、一九四一年）、『エジプトの美術』（社会思想社、一九六三年）、『近代画の歩み』（美術出版社、一九五二年）、『エジプト美術の旅』（雪華社、一九六三年）、『広隆寺』（中央公論美術出版、一九六五年）、『秋篠寺』（中央公論美術出版、一九六八年）、『浄瑠璃寺』（中央公論美術出版、一九六七年）など。「わたくしの指環」（奥村博史遺作集刊行会編、中央公論美術出版、一九六五年一〇月二〇日）の「スカラベ・サクレ」では水沢の持っていたスカラベとトンボ玉を指環に仕立ててもらった時のことが回想されている。

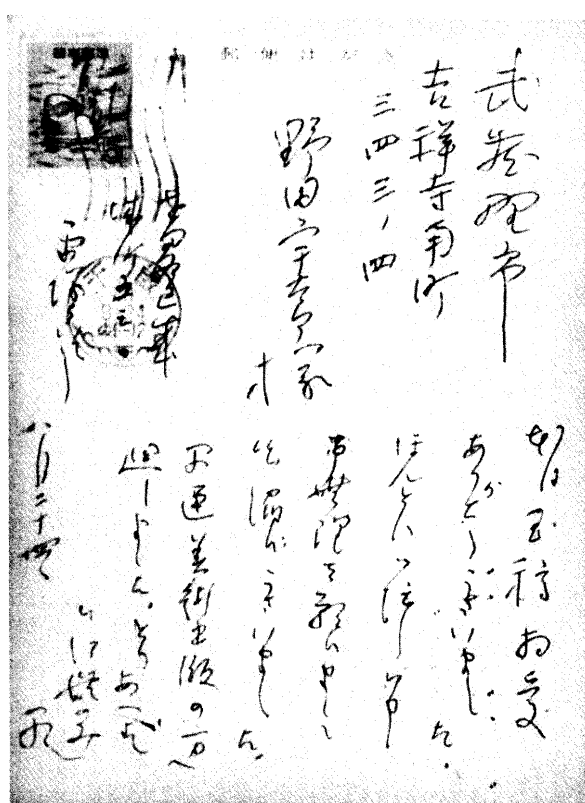
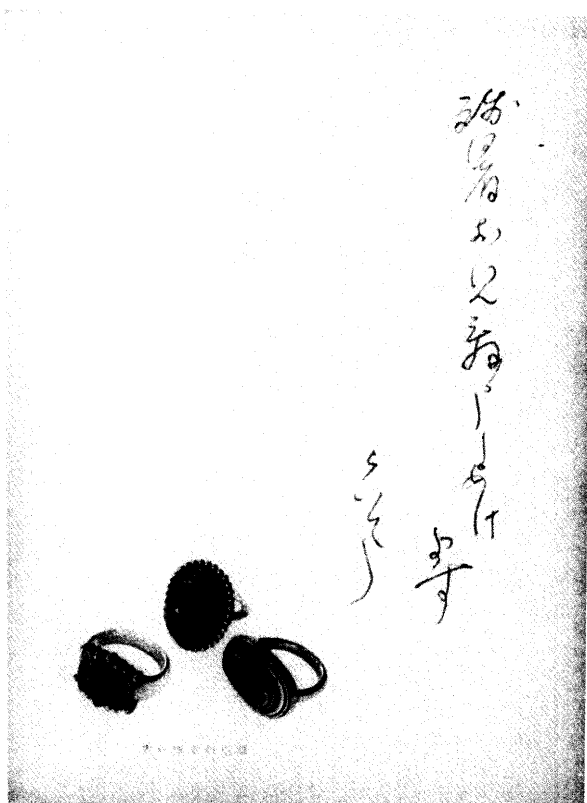
〔20〕一九六五（昭和四〇）年八月二四日付5円切手「奥村博史の指輪」私製葉書（消印 千歳 40・8・24 後6―12）

武蔵野市
吉祥寺南町
三四三ノ四
野田宇太郎様

世田谷区成
城町五三〇
平塚らいてう

（表面）
本日玉稿拝受

ありがとうございます。



〔20〕 1965年 8 月24日付野田宇太郎宛平塚らいてう書簡

ほんとに御忙しい中
御無理を願ひ申して
恐縮でございました。
早速美術出版の方へ
廻しました。とりあへず

御禮のみ

早々

八月二十四日

(裏面)

残暑お見舞申しあげ

ます

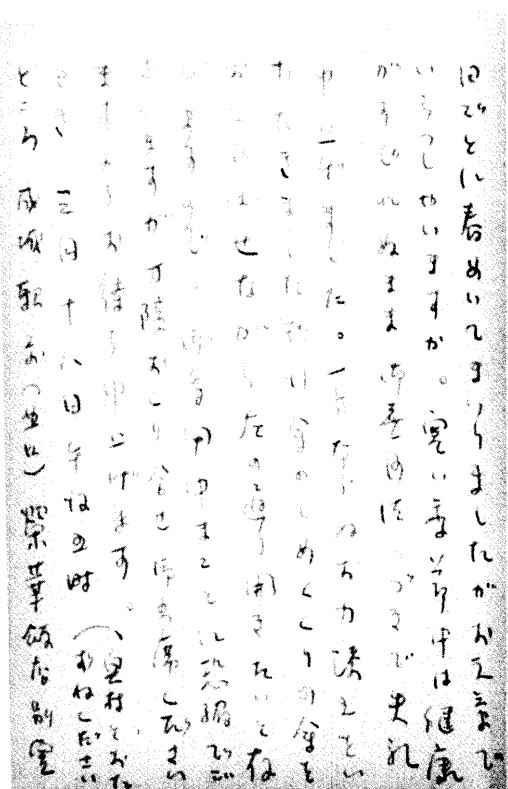
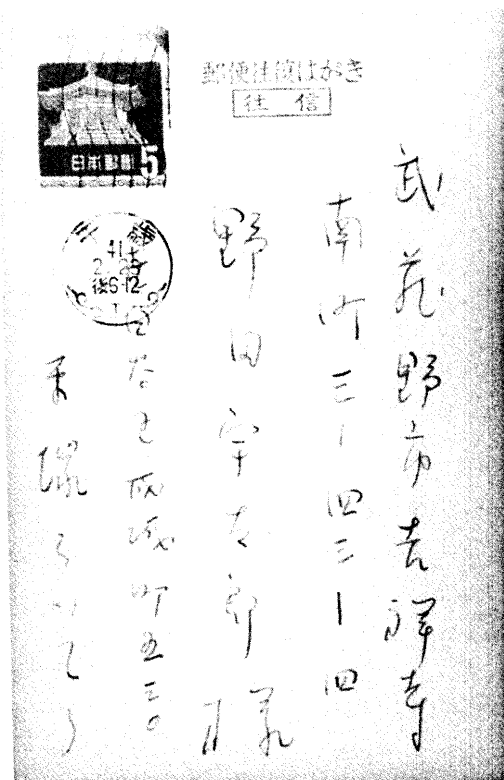
らいてう

〔注解〕

1 玉稿Ⅱ奥村博史の『わたくしの指環』(中央公論美術出版、一九六五年一〇月二〇日)に掲載された野田宇太郎執筆の「奥村さんの指環」のこと。野田は絵画、演劇、写真、文学、そして晩年は指環づくりに情熱を注いだ奥村を描いた。野田が奥村と知り合ったのは長女築添曙生夫妻が野田の家の近くに住んでいたのがきっかけで、一九五一年頃麻布の龍土軒で新龍土会が始まってからである。その新龍土会で奥村が脳貧血で倒れたこと、森田草平の「煤煙」のモデルに關することを尋ねて、教えてもらったこと、奥村の自伝小説「めぐりあい 運命序曲」の出版で相談を受けたこと、奥村の指環を小林哥津から譲ってもらったことなどが綴られている。

(21) 一九六六(昭和四一)年二月二三日付5円往復官製葉書往信(消印 千歳
41・2・23 後6-12)

武蔵野市吉祥寺
南町三一四三一四
野田宇太郎様



世田谷区成城町五三〇

平塚らいてう

(21) 1966年2月23日付野田宇太郎宛平塚らいてう書簡

日ごとに春めいてまいりましたがお元気で
いらつしやいますか。寒い季節中は健康
がすぐれぬまま御無沙汰つづきで失礼
申上げました。一方ならぬお力添えをい
ただきました¹刊行会のしめくくりの会を
おくれらせながら左の通り開きたいと存
じますので、御多用中まことに恐縮でござ
います。が万障おくり合せ御出席くださ
いますようお願い申し上げます。
とき 三月十八日午後五時
ところ 成城駅前(北口) 栄華飯店別室

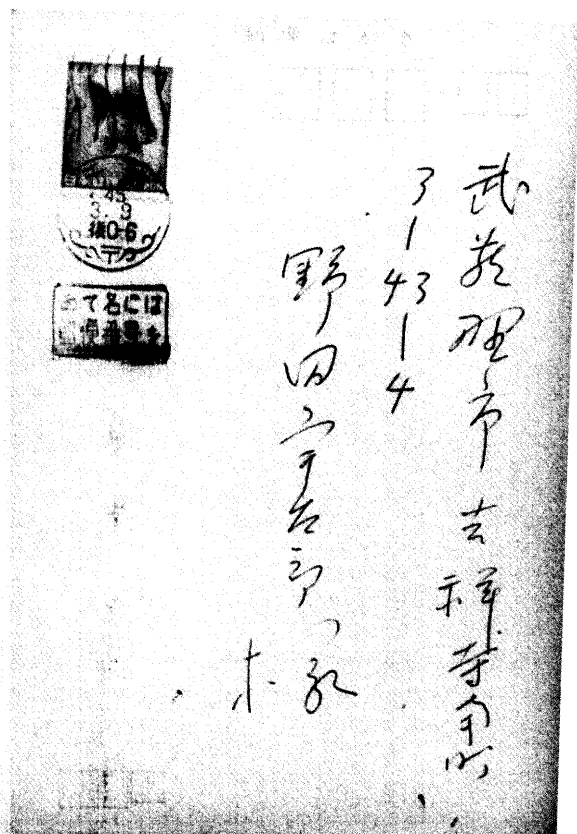
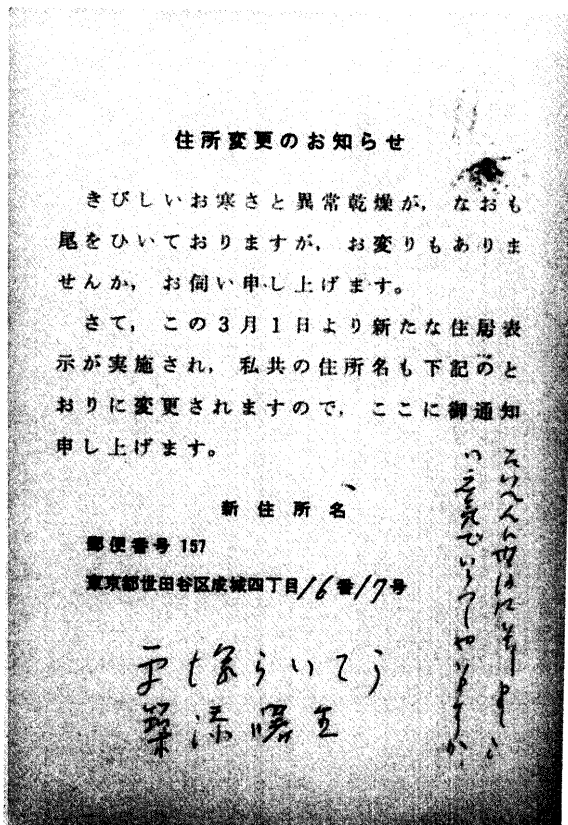
〔注解〕

1 刊行会のしめくくりの会に往復葉書の返信がそのまま残っているの、葉書を用いず口頭
で出席を伝えたのであろう。野田が出席したかどうか、確認は取れない。

(22) 一九七〇(昭和四五)年三月九日付7円切手住所変更葉書(消印 千歳
45・3・9 後0-6)

武蔵野市吉祥寺南町
3-43-4
野田宇太郎様

(印刷 横書)



(22) 1970年3月9日消印野田宇太郎宛平塚らいてう書簡

住所変更のお知らせ
きびしいお寒さと異常乾燥が、なおも尾をひいておりますが、お変わりありませんか、お伺い申し上げます。

さて、この3月1日より新たな住居表示が実施され、私共の住所名も下記のとおりに変更されますので、ここに御通知申し上げます。

新住所名
郵便番号 157
東京都世田谷区成城四丁目16番17号

平塚らいてう
(1) 築添曙生

(以下手書き)
たいへん御無沙汰いたしました。
御元気でいらつしやいますか。

〔注解〕

1 築添曙生 奥村博史・平塚らいてうの長女。曙生の夫築添正二は一九六六年九月一日、五三歳、十二指腸潰瘍で死去した。一九六八年九月一日、長男築添正生編集、曙生発行で正二の追悼集『来らざる時』を自家出版した。正二の発病する二、三ヶ月前に書いた最後の論文「大脳と技術」を巻頭に七編の論文・随筆と年譜、曙生、正生、美可、美土の父への追憶、兄築添増太郎の弟正二への想い出が集められている。正二を亡くした曙生一家は、長男正生の結婚を機会に長女美可、二女美土と共にらいてうの家に一緒に住むことになった。著書『かにさんのはさみ』(小学生物語文庫、教文館、一九五六年。本稿「平塚らいてう書簡」(3)〔注解〕4を参照のこと。

(23) 一九七二(昭和四六)年五月二五日付15円切手死亡通知封書(消印 東京 成城 26・5・71・18—24 JAPAN TOKYO)

武蔵野市
吉祥寺南町三—四三—四
野田宇太郎様

平塚らいてう葬儀委員会

(以下、全文活版印刷)

東京都渋谷区千駄ヶ谷四の一一の九 三〇三号
電話 東京(〇三) 四〇一—六一四七

長く御闘病を続けられた平塚らいてう先生は、五月二十四日午後十時三十六分、ついにお亡くなりなさいました。皆さまと共に心からお悼み申し上げます。つきましては先生との永いお別れの式を左記のようにいたしますことを御知らせ申し上げます。

五月三十日(日)二時—四時まで
青山斎場 地下鉄(青山一丁目下車)
国鉄(信濃町下車・バスにて品川車庫ゆき南青山一丁目下車)

供花は葬儀委員会で準備いたします
一九七一年五月二十五日

平塚らいてう先生葬儀委員

委員長 櫛田 ふき ⁽¹⁾	深尾須磨子 ⁽²⁾	羽仁 説子 ⁽³⁾
市川 房枝 ⁽⁴⁾	高田なほ子 ⁽⁵⁾	石井あや子 ⁽⁶⁾
上代 たの ⁽⁷⁾	丸岡 秀子 ⁽⁸⁾	小笠原貞子 ⁽⁹⁾
神近 市子 ⁽¹⁰⁾	帯刀 貞代 ⁽¹¹⁾	小林登美枝

〔注解〕

1 櫛田ふき 一八九九—二〇〇一。山口県萩市生まれ。日本女子大学中退。婦人民主クラブ書記長、委員長。日本婦人団体連合会会長。新日本婦人の会代表委員。著書『二十世紀をまるごと生きて』、『素敵に長生き』、『たくさんの足音・その一つが歩いた道』、『女性は解放されたか』、『女性十二講』、『八度めの年おんな』、『愛と希望の星みつめて』、『絶対平和の生涯』。

2 深尾須磨子 一八八八—一九七四。詩人。兵庫県丹波生まれ。京都菊花高女卒業。詩集『真紅の溜息』、『斑猫』、『呪詛』、『焦燥』、『牝鶏の視野』、『イヴの笛』、『永遠の郷愁』、『洋燈と花』、『詩は魔術である』、『神話の娘』、『列島おんなのうた』、『詩文集』、『哀しき愛』、『評伝』、『君死にたまふことなかれ』、『与謝野晶子』。

3 羽仁説子 一九〇三—一九八七。評論家、婦人運動家。東京生まれ。自由学園高等部卒業。日本子どもを守る会会長。著書『シーボルトの娘たち』、『青春をどう生きるか』、『若き日の軌跡—私の学生の頃』、『しあわせにつながるもの』、『妻のこころ—私の歩んだ道』、『羽

仁説子の本」。

4 市川房枝 一八九三―一九八一。愛知県生まれ。愛知県立女子師範学校卒業。教員、新聞記者、「新婦人協会」創立。日本婦人有権者同盟会長。参議院議員。著書「市川房枝自伝戦前編」、「私の言いたいこと」、「だいこんの花」、「野中の一本杉」。

5 高田なほ子 一九〇五―一九九一。福島市生まれ。福島師範卒。小学校教師、後、婦人運動家、平和運動家。参議院議員（社会党）。日本婦人会議議長。退職婦人教職員全国連絡協議会会長。著書「雑草のごとく」（ドメス出版）。参考文献「扇をひらいた人——高田なほ子と千葉千代世」（第一書林、一九九二年五月）。

6 石井あや子 新日本婦人の会代表委員。著書「女らしさの昨日今日明日」（啓隆閣、一九七二年）。

7 上代たの 一八八六―一九八二。島根県生まれ。島根市高女卒。日本女子大学英文学部卒。ニューヨーク州ウェルズ・カレッジに入学、同学より修士号。日本女子大学英文学部教授。日本女子大学第六代学長。日本大学婦人協会会長。婦人平和協会会長。著書「リー・ハント（英米文学評伝叢書）」、「上代たの文集」、「上代たの先生米寿記念英米文学論集」。

8 丸岡秀子 一九〇三―一九九〇。長野県生まれ。奈良女子高等師範学校卒業。教師、産業組合中央会調査部勤務。著書「戦後精神」、「いのちへの責任」、「キューリー夫人の慟哭」、「近代日本婦人問題年表」、「現代婦人百科」、「思潮」上下、「国際婦人年とはなんだったのか」、「心の血縁を求めて」、「ひとすじの道」一―三、「田村俊子とわたし」、「ひとつの真実に生きて」、「女のいい分」、「変貌する農村と婦人」、「いのちと命のあいだに」、「婦人は考える」、「女性が変わるとき」、「農村婦人」、「独りを恐れず」。

9 小笠原貞子 一九二〇―一九九五。東京生まれ。参議院議員（共産党）。日本共産党副委員長。著書「面を太陽にむけて」（啓隆閣、一九七一年）、「きたぐに」（東邦出版社、一九七四年）、「一粒の麦——政治に愛を」（学習の友社、一九八三年）、「花のとき」（新日本出版社、一九九〇年四月）、「今日の空は青」（新日本出版社、一九九二年一〇月）。参考文献「いのちすがしく 小笠原貞子さんを偲ぶ」（日本共産党北海道委員会、一九九六年）。

10 神近市子 一八八八―一九八一。長崎県生まれ。女子英学塾（津田塾）卒業。評論家、衆議院議員（社会党）。著書「灯を持てる女人」、「女性思想史」、「私の半生記」、「わが青春の告白」、「神近市子自伝——わが愛わが闘い」。小説「村の反逆者」、「一路平安」。

11 帯刀貞代 一九〇四―一九九〇。島根県生まれ。著書「日本労働婦人問題」、「日本の婦人」、「日本の婦人 婦人運動の発展をめぐる」、「ある遍歴の自叙伝」、「現代女教師論」、「女性の生き方」。

(24) 一九七一（昭和四六）年六月七日付15円切手黒枠封書（消印 成城 46・7 後0―6）

武蔵野市吉祥寺

南町三―四三―四

野田宇太郎様

東京都世田谷区成城4―14―6

（活版印刷）

奥村 敦史

綾子

東京都世田谷区成城4―16―17

築添 曙生

（封筒のみ、本文なし）

【注解】

1 綾子 奥村綾子。旧姓中山。一九四四年一月三日奥村敦史と結婚。

五

野田宇太郎宛の平塚らいてう書簡を読んで感ずることは、骨肉の愛ということである。「若い燕」と揶揄された年下の奥村博史との共同生活、長男敦史の幹部候補生志願のため婚姻届提出などは、いかに夫婦の愛、親子の愛が強靱なものであったかを知ることができる。そこで、本稿で扱ったらいてう書簡を材料にして、平塚らいてうの晩年を考えてみたい。

野田宇太郎が平塚らいてうに交流を求めたのは、前述のように『青鞥』に小説を発表していた鷗外夫人森しげ女の原稿に鷗外の手が加わっていたかどうかを尋ねた時が最初であった。もちろん、らいてうはしげ女の原稿には鷗外らしい加筆と思われる跡などはなかったときっぱり答えた。その後も文学史的事実、文壇の動静、文学地理、風土的関連などについて確認を求めたことであろう。従って平塚らいてうと野田宇太郎との交流は、あくまで文学散歩取材から始まったものと思われる。

書簡(1)(2)は樋口一葉終焉の地本郷丸山福山町の『一葉樋口夏子碑』の碑文を、野田がらいてうに揮毫を依頼した時のものである。野田がなぜ、一葉と直接関係ないらいてうに依頼したか詳細はわからないが、岡田八千代がなかなか承諾しないため、とうとうらいてうが引き受けざるを得なくなった経緯がうかがえる。同じ明治の代に生きた女性として選ばれたのであろう。

書簡(3)では北原白秋の二番目の妻、江口章子について野田の『六人の作家未亡人』(新潮社)「国民詩人の妻 北原白秋未亡人菊子さんの」爪に描いた蜚」と、らいてうの『平塚らいてう自伝』—元始、女性は大陽であった—下巻「江口章子の波乱の生涯」との事実上の食い違いとは何をさしていたか、よくわからないうが、らいてうが知っている事実となると、やはり江口章子が青轡社を訪ねたり、さらに生田花世を通じて白秋と知り合う隠された真相があったのかもしれない。

また、長女あけみ(曙生)は一九四五(昭和二〇)年十一月茨城県の疎開先より夫正二が借り受けた武蔵野市吉祥寺の知人宅二階に家族と共に転居した。ここで同じ吉祥寺に住んでいた野田宇太郎一家と親しくなった。「娘あけみが何かと御厚情にあづかっておりますよし」とあるのは、そういう近所付き合いから始まった両家の親密さをいっているのだろう。それが後に『文学散歩』の「南郷四季」連載へ繋がっていくのである。

奥村博史の自伝小説『めぐりあい 運命序曲』を出版社現代社より贈呈されたのは、文芸評論家としての野田に夫博史の小説を評価してもらいたいという妻らいてうの夫への愛情である。その愛がいかに深かったかは、博史死後、らいてうが『奥村博史素描集』と『わたくしの指環』の出版に晩年の全情熱を注いだことによつてうかがえる。

一九六一(昭和三六)年三月の書簡(5)以降「裸女百態」の私製絵葉書を作成して出している。このころから博史のデッサン集出版の意向があったのが感じられる。

一九六一年一月、いくつもの商業文芸雑誌を潰してきた野田宇太郎は、やっと念願の文学と風土を関連付けた意中の雑誌『文学散歩』を創刊した。表紙と口絵に当時としては上質紙にカラー写真を掲げ、各所に写真をふんだんに使った高踏的な洒落た雑誌であった。らいてうが「若いころ—大正はじめ頃の仏文学誌を手にしたときのような新鮮な、清潔なたのしいおもいを味わいました」と感想を述べたのも、単なるお世辞だけではなからう。平塚家は一九九四(明治二七)年、三番町の家を解体して本郷区駒込曙町一三番地に移転した。それに伴って、富士見小学校から本郷西片町の誠之小学校に転校した。だから野田の『文学散歩』—三号所収の「東京文学散歩」の「本郷・小石川」はらいてうにとって「思い出の地」なのである。

らいてうの長女築添曙生は夫正二と子どもたちと共に滋賀県立近江学園(精神

薄弱児施設)内に住み込んでいた。ジャーナリストで小説や随筆も書いた斎藤甲花が精薄児の愛育に生涯を捧げようとした近江学園は、琵琶湖から流れる瀬田川が石山のあたりを過ぎる宇治川の河畔の南郷にある。曙生は夫婦で不幸な精神薄弱児の救済と教育に尽瘁していた。「南郷四季」はその愛育記録である。らいてうも娘の「南郷四季」の成功を心から望んでいたのである。

書簡(6)は野田宇太郎編集『文学散歩』十四「回想の岡田八千代」(一九六二年六月二〇日)に掲載される原稿を、野田がらいてうに依頼したものである。らいてうは一旦承諾したが、姉孝の死去、葬儀や風邪をこじらせたりで、とうとう書くことができず、「岡田八千代『青轡』所載作品目録」が掲載された。なお、岡田八千代は『青轡』創刊に際して与謝野晶子・小金井君子・森しげ・長谷川時雨・国木田治子などと共に青轡社賛助員になった。

書簡(8)は『文学散歩』一五「鷗外生誕百年の記念」(一九六二年一〇月一日)に掲載する森鷗外についての思い出の原稿依頼をしたものである。らいてうは依頼に応じて「鷗外先生について」を書いた。その中でらいてうは「女ばかりの仕事であった『青轡』に対し、またわたくしに対しても、終始、温い理解、好意ある関心をお示し下さったという感じ」を抱き、鷗外を敬愛しているが、それに引き換え「漱石の婦人に対する態度、その無関心さと、無理解さくらべて何という違いでしょう」と漱石に対する反感をあからさまにしている。森田草平との塩原逃避行後の漱石の対応は、「森田は今度の事件で職を失った(郁文館という私立中学の英語教師でした)、あの男はものを書くよりほかに生きる道をなくした。あの男を生かすために、今度の事件を小説として書かせることを認めてほしい。貴家の体面を傷つけ、御迷惑をかけるようなことは自分の責任においてさせないから曲げて承知してほしい。」(『平塚らいてう自伝』—元始、女性は大陽であった—上)という手紙であった。平塚家としては世間を騒がし、それを小説に書いて売り物にすることは、承服しがたいことであった。その怨念は晩年まで続き、鷗外と漱石との好悪の違いとなったものである。

書簡(9)は年賀状であるが、世界連邦樹立をめざした理想主義、平和主義的なもので、らいてうの変わらぬ熱い思いを見ることが出来る。らいてうの世界連邦との関わりについては、『平塚らいてう自伝』(戦後篇)続元始、女性は大陽であった(一九七二年一〇月二〇日)の「一つの世界」—世界連邦主義を知る—「世界連邦建設同盟で活動」で知ることができる。

書簡(10)は夫奥村博史の死亡通知である。らいてうが初めて奥村に茅ヶ崎の南湖院で出会い(一九一二年八月)、「大きな赤ん坊のような、よごれない」彼を母や姉のような思いで可愛がってやりたいように愛し、共同生活(一九一四年一月)に入り、五〇年の夫婦生活(内、二七年半は婚姻届出さず)にはさまざまな起伏があった。若くして高名な女性解放のリーダーだったらいてうと五歳年下で収入のない画家博史、住居と新婦人協会の事務所が同じ家屋内にあることから演劇に関心を寄せ始めた博史の不満が高じてきた。絵を売ることに全然欲がない博史との軋轢、気持ちのすれ違いから夫婦に危機もあった。経済的貧窮から脱したのは博史が成城学園に絵画と演劇部の教師の職を得てからであった。彼は融通無碍な自由人であらゆる芸術に興味と関心を寄せた。指環は絵画と共に著名であるが、演劇、音楽、舞踊、宝石、オルゴール、時計、写真、カメラ、骨董、小説、詩と際限がなかった。らいてうは夫の自由と芸術の最大の理解者であった。博史歿後のらいてうは夫の遺稿の出版に懸命に奔走した。それはらいてうの夫博史に対する鎮魂の営みであった。

書簡(12)は一九六四年七月ころから奥村博史のデッサン集出版を野田宇太郎に依頼していたことがわかる。出版準備相談会案内状の印刷とデッサンの選画が始まっていた。宣伝のため、『文学散歩』に奥村博史の詩を発表することになった。野田は全面的に支援することにした。

らいてうが奥村博史を選んだことは彼女にとってマイナスであったという意見もあるが、らいてうは決して後悔することなく、誠心誠意彼を愛した。らいてうが博史の書き残した手帳を読み、彼がどれほどデッサン集の刊行に執心していたかを知り、らいてうは墓を建てるよりもデッサン集をぜひ自分の手で出版しなければならぬと涙ながらに決心した。彼女が博史の画芸を認めていたというよりも、むしろ彼の遺志を生かし、彼の霊を慰めたかったのである。そして、野田宇太郎に出版の周旋を依頼したのである。先ず野田が世話人代表となり実務を担当し、武者小路実篤をもう一人の世話人代表として頭に頂き、「奥村博史遺作集刊行会」の発起人を依頼することになった。

書簡(13)は「奥村博史遺作集刊行会」発起人依頼の手紙である。百名あまりに依頼状を出したとある。次便によると、一一四名の発起人氏名が記載されているので、依頼したほとんど全員が承諾したのである。

高群逸枝の死はらいてうに大きな衝撃を与えずにはおかなかった。自叙伝『火

の国の女の日記』を九百枚まで書きながら、遂に命尽きた高群を深く惜しみ、悲しんだ。かつて、高群はらいてうにこう書いた。「私はあなたを母胎として生まれてきたものでございますし、私ほどあなたのために、激昂したり、泣いたりしたものがございましょうか。」「あなたの伝記を書くことのできる、たった一人の存在が、私であることさえも、私はかたく信じています。私はもしかしたら、あなたご自身よりも、もつとあなたをいい現わすことができるかも知れません。なぜなら、私はあなたの娘ですもの。あなたの血の純粋な塊が私ですもの。」「らいてうもまた、「高群さんに対しては、魂の奥深いところで、血を分けあったきょうだいに對するような、なつかしさを、終始いだきつづけたのです。」「(平塚らいてう自伝(戦後篇)続元始、女性は大陽であった)」「高群逸枝さんの訃報」と書いている。それは遠く一九二六年ごろ、らいてうが始めて高群の存在を知った感動を「まるで恋人の姿や声やその言葉の一つ一つが、たえず頭のなかを胸のなかを駆けまわるように、高群さんの詩句の断片で、わたくしの心は占められたかのようでした。」「そのころ——いいえ、その後も終始、高群逸枝さんほど、わたくしを惹きつけたひとはありません。ただ、もう無性に好きになつてした。」「(高群逸枝さんに魅せられる——「無産婦人芸術連盟」のころ)と述べているが、その思いは終生変わらなかった。

書簡(14)は「奥村博史遺作集刊行会」発起人承諾に対するお礼状である。発起人の氏名一覧があるが、一一四名にも及ぶ。奥村博史・平塚らいてう夫妻の交友範囲が網羅されていると思われる。七月一二日平塚宅で開かれた刊行会発起人有志一五名とは誰であったか、これだけの資料ではわからない。しかし野田宇太郎が入っていたことだけは確かである。

書簡(15)は『奥村博史素描集』の販売方法と『わたくしの指環』の出版社探しの相談である。『わたくしの指環』の出版は当初同じく平凡社に依頼する予定であったが、平凡社が採算を考えてか、出版を拒絶した模様である。それで出版社を探すことになり、出版界に詳しい野田に美術専門出版社の紹介を頼んだのである。結局『わたくしの指環』は中央公論美術出版から発行されたが、野田の紹介であるかどうかかわからない。『奥村博史素描集』と『わたくしの指環』は二冊とも野田宇太郎文学資料館に収蔵されている。

書簡(16)は『文学散歩』第二二号掲載のお礼と『奥村博史素描集』の刊行趣意書の報告である。本稿「平塚らいてう書簡」(15)では「実は申込の規約のよ

うなものも今度の「文学散歩」に間に合うように御送りしたいと考えておりましたけれど結局こんなわけでそれがだめになりました。……もう無論雑誌は出来上りました頃と存じますけれども」とあったが、『文学散歩』第二二号（一九六四年九月）に間に合い、奥村博史の「素描について（遺稿）」、平塚らいてうの「奥村博史の裸婦素描について」が掲載され、野田は「編集室より」で刊行会が組織され、協力要請のキャンペーンを張った。

書簡（17）は『奥村博史素描集』発行（十一月三〇日）大詰の段階に入った時期のものである。「速達」とはどんな内容であったか、今はわからない。「印刷」とは『奥村博史素描集』の印刷であろう。三〇日の発行まで後三日しか残されていなかった。

「龍土軒」は野田宇太郎が『日本耽美派の誕生』（河出書房、一九五一年一月一五日）の「龍土会とパンの会」で研究したように、近松秋江が「自然主義は龍土会の灰皿から生れた」と言った龍土会の舞台となったフランス料理店「龍土軒」（麻布新龍土町）のことである。この龍土軒は戦後再建された龍土軒である。一九五一年頃ここで森於菟や野田や奥村たちが新龍土会を開いていたのである。

なお、『日本耽美派の誕生』（河出書房）「龍土会とパンの会」によると、「平塚らいてうなどの紅一点も時には顔をみせたやうである。」とあるが、『日本耽美派文学の誕生』（河出書房新社、一九七五年一月二八日）「龍土会とパンの会」ではこの一行が削除されている。おそらくらいてうに確認を求めた結果、否定されたのであろう。この誤りは、野田宇太郎が蒲原有明の「龍土会の記」（『飛雲抄』所収、書物展望社、一九三八年二月十日）の中に出る「平塚君」を平塚らいてうと早計したところから生じたものであろう。蒲原有明の「平塚君」が誰なのか、今はわからない。柳田国男「東京の三十年」（『定本柳田国男集』第二十三巻、筑摩書房、一九六四年二月二五日）、和田謹吾の『自然主義文学』（文泉堂出版）の「龍土会の足跡」には「平塚」は出て来ない。

書簡（18）は奥村博史の『わたくしの指環』の出版に関するやりとりであろう。野田が最初紹介した出版社は東芝印刷だったのだろう。それでいろいろ折衝の末、結果的には不調に終わり新たな出版社を探すことになり、最終的に中央公論美術出版に決定したのである。

『文学散歩』は第二四号（一九六五年七月二五日）のことで、当初の計画と違って原色版はなく、随筆もない。その代わり奥村の遺稿「わたくしの指環」が掲載

された。

いずれにしても亡夫の遺著出版に残された情熱を必死に傾けるらいてうの残熾を見る思いがする。

書簡（19）は奥村博史の『わたくしの指環』出版準備の報告である。『文学散歩』の第二四号には「奥村博史指環の本の刊行」の紹介記事も掲載されたのでお礼を述べている。『わたくしの指環』実行委員は伊勢正義・高橋邦太郎・中西悟堂・野田宇太郎・水野以文・水沢澄夫の六名であった。一九六五年七月一日「奥村博史指環の会」を麻布龍土軒で開き、奥村制作の指環一六三点を借用、その他の愛好者や家蔵のものを加えて、二百数十点を収録することができた。回想「その人その指環」は二四編集まった。伊勢正義と水沢澄夫を中心に七月の猛暑の中で撮影された。発行部数限定五〇〇部、定価二五〇〇円、一九六五年一〇月二〇日発行された。

書簡（20）は『わたくしの指環』に収録される野田宇太郎の「奥村さんの指環」の原稿が届いた御礼である。野田の文章は奥村の稀に見る好事家、ディレクターぶりをよく表わしている。野田も小林哥津から奥村の作った琥珀の指環を譲ってもらったことを書いている。野田は「人間にはいろいろな生き方があるが、奥村博史さんのようなたのしい（少くとも外側からは）生涯は稀であろう。」と冒頭に書いた。

書簡（21）は奥村博史遺作集刊行会しめくくりの会の招待状である。『奥村博史素描集』・『わたくしの指環』二冊の遺作を無事出版し終え、らいてうは夫博史の素志を成し遂げて、半世紀に及ぶ夫婦の宿願を成就した歓喜と安堵で感涙に浸っていたことであろう。

書簡（22）は住居表示変更の知らせである。本文は印刷で、手書きのコメントはらいてうの字ではなく、娘の曙生の字のようである。

書簡（23）は平塚らいてう葬儀委員会からのらいてう死亡通知である。

書簡（24）は奥村敦史夫妻・築添曙生からのらいてう死亡通知である。このように野田宇太郎宛の平塚らいてう書簡を通して痛切に感ずることは、らいてうが奥村を始めて愛した時から一貫して、母のごとく、姉のごとく「私がこの大きな、大人になれない坊やをかわいがってやらなければならぬ」という意識は終生変わらなかったことである。博史の死後、らいてうは夫のベッドの下に手帳を発見した。「元来あまり世間への発表欲をもたなかった自分は、

自分の仕事が誰からも認められなくとも、それほど意に介することではない。が、しかし、いつまでも、いつまでも自分自身に認められないとしたら、これはいささか参るだろう。自分の興味はもっぱら今後の自分の仕事の上にかかっている。

——何とも命が惜しい！」同じページに、「デッサン集刊行実現努力のこと——おれがしないで誰がする、今やらないでいつできる。」と書いていた。それを読んで彼女は涙の中で墓を建てるより先に何をおいても彼が企画したデッサン集を作らなければならないと心に決心した（『奥村博史素描集』平塚らいてう「ごあいさつ」）。野田宛のらいてう書簡には彼女の執念がひしひしと伝わって来る。らいてうは博史に七年遅れて瞑目した。

奥村博史は二人の愛の終末の日近く、次のような詩を作った。

黒いといってもブリュネットの妻の髪

二人が結婚した頃はシルクのやうに

やはらかかった妻の髪

同棲五十年に日も近い今は

あらまし輝く白髪となつて

一層ぬめのやうなやはらかさを加へて

何にたとへやうもない手ざはり

わたしは日にいくたび妻のこの髪に

手をふれてなでることだらう

妻の髪をなでるたびにおのれの心はなごみ

妻もやさしいまなこをわたしに向ける

妻よ、おたがひになんとしても

せめてもう十年を一層よく生きやうよ

その頃はほんたうに

世界に平和がもたらされるだらうか

〔付記〕今回は文部省科学研究費補助金（一般研究C）による野田宇太郎文学資料館所蔵書簡研究の第十一回報告である。調査にあたって野田宇太郎文学資料館の山下徳子氏に資料整理や複写で御援助いただいた。深く感謝申し上げる。